

実力のある彼を

祈島

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Aクラス配属となった彼は、今日も彼や彼女と関わっていく。

目次

第一章

| | |
|----------|----|
| 坂柳有栖の勧誘 | 1 |
| 葛城康平の考察 | 14 |
| 綾小路清隆の交友 | 28 |
| 櫛田桔梗の接近 | 42 |
| 一之瀬帆波の信頼 | 55 |
| 龍園翔の関心 | 76 |
| 高円寺六助の助言 | 98 |

第一章

坂柳有栖の勧誘

リーダーとは「希望を配る人」のことだ。

A leader is a dealer in hope.

嘗てフランスの皇帝として力と名を知らしめたナポレオンの言葉である。

現代社会でもリーダーは集団を牽引することこそが使命であり、年上の者の引退を待ち続けた後に椅子にどっしり構えて威張り散らすことなど誰もが見望していない。今の先にある希望を見据え、それを周囲に語らなければ主に歩んでくれる者はいずれ消え去ってしまう。

リーダーであり続けたいのであれば、暗き道に出くわしたのであれば、照らし続けることを欠かしてはならない。

裏を返せば、「希望を配る人」であるならば、自ずと人は付いてくる。

それが自然界の掟である。逆らうことは出来ない。



「——白川くん」

5月。

全国屈指の名門校、高度育成高等学校に160人の新入生が訪れてから、一か月が経過した。

入学してからの初めの一か月は特に目立つイベントが一年生を迎えることはなく、外部との接触が完全に絶たれたこの特殊な学校での新生活に慣れること、そして新たに割り振られたクラスの中及び外の生徒との交友に勤しむことに重きを置かれていた。

しかし平穏と忘憂に満ち満ちた学生生活に終わりを告げるかのように、生徒たちに学校からの評価が現実を叩きつけた。

——クラスポイント

クラスに属する生徒達を評価したポイント。テスト結果や授業態度だけでなく、授業時間外での行動などを含めて総合的に評価された結果である。新入生にはその存在を一か月知らされることがなかった。

その結果、枷となるものがなかった力漲る若者達は自由気儘に過ごし続け、その結果

スタート時の1000ポイントから多く減点されたクラスばかりが生まれてしまった。

「白川くん」

「……ああ、坂柳か。いたんだ」

「先程から呼びかけていたのに、ひどいですよ」

尤も、ここにいる二人が所属しているAクラスはクラスポイントが5月の時点で940ポイント。ノーヒントで試された4月をたったマイナス60ポイントで乗り越えたとても優秀な集団である。

二人がいるのは敷地内のカフェ。4人掛けの丸テーブルに向かい合うように腰を椅子に下ろしている。

「本を読んでいるから気づかなかった」

白川と呼ばれた少年は、二人でカフェに来ているのに読書に夢中になっていた、という何とも身勝手な振る舞いをしていた訳ではない。彼は元々一人でこのカフェに訪れており、声をかけ始める直前から坂柳という少女がこの席に加わったのである。その証拠に、テーブルの上に置かれたカフェの飲料は彼の傍にある一杯だけだ。

そう弁明して彼はまた一ページを捲る。

「私が来たのに読書が続けるのは少し傷つきますが、」

不貞腐れながら、少女は少年の前に座った目的を果たそうと、本題を投げかけた。

「——白川君は何時になったら私の派閥に入ってもらえるんでしょうか？」

「……………」

またそれか、とでも言いたそうな力弱く細めた目を本から坂柳にチラリと向けた。そしてまた本へと視線を戻す。

「入りたくなつたら入るよ」

「どうしたら入りたくなるのでしょうか？」

幾度も使い古された白川の返事がまた来たことに、坂柳はうんざりしてしまふ。

AからDまでの4クラスはそれぞれ独自の纏まり方をしている。

暴力によって支配されたクラス、一人のカリスマによって束ねられたクラス。

二人が所属するAクラスはここにいる坂柳と葛城という男子生徒の二大巨頭によって二分されており、日々睨みあう冷戦状態である。クラスの実力の指標であるクラスポイントには学年最高値ではあるが、最も纏まっていないクラスとも言えるのかもしれない。

「私の派閥に入ることがそんなにも嫌なのですか？」

「そんなことはないけど、今のままで問題ないからさ」

Aクラスのほぼ全員が二つの派閥のどちらかに身を置く形となっている。リーダーの熱烈な信者として日夜尽力する生徒もいれば、仲のいい友達が所属しているから何と

なく付いていつているというだけのライトな層もある。

完全な中立派と呼べるのは今となつてはほんの一握りだ。その内の一人が白川である。そのせいなのか、彼は坂柳派、葛城派の両派閥のクラスメイトと気兼ねなく交流できる希少な立ち位置を築いていた。

「オレなんかいてもいなくても変わらないよ」

「——本当にそうでしょうか？」

坂柳の言葉に小さくも確かな熱が加わる。眼差しも揺らぎがない。

「先日行われた小テスト。学年全体でも満点を取れたのは私と白川くんだけです」

「……」

「それにクラスポイントなるものの存在にも、入学してすぐの段階で気づいていらつしやいましたよね？」

「それは、……まあ、」

菌切れの悪い返事をしながら白川は本のページを捲る。坂柳のような美少女に称賛を通じて心理的に迫られてはに candide であるわけではない。並べられた事実により下手に否定したり難癖付けたりしても都合のいい展開にはならないと白川は悟っているのだ。

「体育の授業は私はいつも見学しています」

彼女は先天性心疾患を患っているため運動を全て禁じられ、杖がなくては十分に歩行

もできない。

「そのため白川くんをよく見てはいますが、」

「見ないでよ、えっち」

「いつもやる気が足りないように見受けられますが、白川くんは身体能力もかなり高いですよ？ 頭脳もトップクラス、そんな大変優秀なあなたを勧誘することは、そんなにもおかしいことでしょうか？」

「……、」

再び白川は口を閉じてしまう。

少女からの熱いアプローチに少年たる照れを隠そうと奮起しているわけでない。デジャブを感じていたのだ。

「葛城にも同じようなことを言われたよ」

「そうですね、先を越されてしまって残念です」

とはいうものの、葛城からの勧誘も断つてのこの場の会話ありというもの。それはそれで坂柳は安堵の胸をなでおろす。同時に彼の中では敵勢力と同等に扱われているという事実には他ならないのが彼女は気に入らない。

「まあ、力になれることはするさ。クラスメイトとして」

「そうですね」

最後の一言がどこか余計に感じてしまいながらも坂柳は提案する。

「でしたら、明日の夕方に私の派閥の中で勉強会をする予定ですので、白川くんはそこで教師役になってはいただけませんか？　もうすぐ中間テストもありますので」

「すまん、葛城にも誘われて、先にオーケーしちゃった」

「……………そうですか、先を越されてしまつて残念です」

「明後日とかならないよ」

「でしたら、明後日によろしくお願いします。」

「ん、オーケー」

今度は偽りのない悔恨がこみ上げてしまう。彼の中では平等に手を貸しているのだろうが、後れを取ったことが坂柳にとつては不服だったのだ。

坂柳の気持ちなどつゆ知らず、マイペースなまま本のページを捲り、店で購入したドリンクを手に取り、少量をストローで口に入れる。

「白川くんは何を飲んでいるのですか？」

「これ？　店の新作だつてさ」

坂柳は彼が飲むものが目に止まり、尋ねる。

そして彼がこのカフェにいた原因がそのドリンクであると考えが至つた。普段は読書するならそれ相応に図書館にいたことが多い彼だが、今日はカフェを訪れていた。一

か月彼の情報を集めたが、店の新商品を試す傾向があることが分かっていたので。

「飲む？」

「……は？」

一瞬彼が言うことが理解できなかったらしく、坂柳は首を小さくかしげていた。

そんな彼女の困惑に構わず、白川はドリンクが入るカップを向かいに座る坂柳の傍まで手を伸ばして置く。そして構わず読書を続けている。

「……………」

坂柳は静かに新作ドリンクを見つめ、一つ訴えたい気持ちになる。目の前に置かれたモノをどうしろというのか。

いや、どうするものなのかは理解している。選択肢が無数にあるわけではない。飲むか飲まざるか。そのたった二択。

しかしソレは先程から彼が飲み続けているものである。それはつまりピンクでお花畑な甘いイベントの一つである間接キスに突き進むか否か。その関門に坂柳は対峙していた。

彼はそのような色恋には無関心なのだろうか。それとも無表情ではあるがその裏はこちらを全力でからかっているのか。それとも坂柳という少女は一定のボーダーに達していない、対象外の存在なのだろうか。それとも誰であっても同じことを平気で進ん

で行うプレイボーイなのか

「……」

どうぞと差し出されて顔を嚙めて突っぱねるのもいかなものだろうか。坂柳はこの場で本を読む彼に自分から近づいて来た身として謎の責任感に苛まれ、仕方なく、それはもう仕方なくカップに手を伸ばしてストローに口を付け、弱弱しくも確実に液体を吸い込む。

「……………とても甘いですね」

それは単純に数値化できる糖分だけによるものなのか、はたまた他の少女にとっては未体験で未知の成分によるものなのか。

目の前の彼はきつと特別甘いもの好きであり、過剰に甘く感じた自分は正常なのだ。そう坂柳は己に言い聞かせる。

「うん、新商品だから釣られて買ってみたけど思ったより甘かった」

他意もない同意を受け入れながら、坂柳はカップを白川の元に戻す。

その時の彼女の頬は少し赤くなっていた。尤も、本に視点を当てている白川は全く気付いてはいらなかったが。それが彼女にとっては幸運だったのかもしれない。

「あ、そうだ」

なにかを思い出したらしい白川は、カバンに手を伸ばしてとあるものを取り出した。

それは紙の束が入ったクリアファイルだった。

「それは？」

「勉強会で思い出した。中間テストの過去問もらったから、コピーあげようと思つてたんだ」

「……え？」

とんでもないものを取り出した白川に坂柳は驚かされる。

この高度育成高等学校では中間テストや期末テストで赤点を一つでも取ろうものなら一発で退学になってしまうという厳しいルールを生徒たちに与えている。その事実を知らされた生徒たちの中には顔を青くしてしまう者もいた。しかし、二人の担任である真嶋教師は、今回の中間テストに限っては、先日の小テストの点数が如何に低空飛行していようと確実に乗り切ることが出来る術があるような口振りだったのだ。

そこから導き出される仮説の一つ、それが過去問。

毎年同じ問題が出題されるのではないか、その考えは坂柳も中間テストの詳細を聞いた時点で持っていた。そして自分の派閥に身を置く手下もとい友人にはそれを入手すべく動いてもらおうと計画してはいた。

しかし、目の前の彼はどうだろうか。

苦も無くテストを乗り切られる神器を手に入れ、意地悪にも隠すことなく共有してき

た。クラス内で大勢の上に立つ坂柳にだ。

「……ちなみにどなたからこれを？」

「他クラスの友人からね。そいつは仲のいい先輩からもらったらしいけど、過去問なんていらなからつてコピーもせずにくれたんだよ」

「随分と自信がおりな友人なんですね」

『過去問などなくても、私が上位に入るとは確実なのだよアツハツハツハ』つて言つてた」

「ユニークな友人をお持ちなんですね」

他クラスに白川の親しい友人がいることは、坂柳の調査結果の中にはなかったことだ。

「実際スゲー優秀な奴だからね」

「白川くんよりもですか？」

「そうだよ」

「またご冗談を」

頭脳では坂柳に匹敵し、運動能力も申し分ない。身体面を考慮すれば総合的には白川が坂柳を上回っていることは目を背けられない事実であると彼女は認識している。そんな彼が自分より優秀な人物が同級生にいるというのは信じがたいものであった。優

秀な人物はAクラスに、それがこの学校の入学時点での生徒の割り振り方。Aクラス以外に在籍しているだなんてより疑わしい。

しかし、これ以上の追求は無駄と察したのか、坂柳は過去問が入ったクリアファイルを素直に受け取った。

「これは私の派閥で有効に使わせていただきますね」

「ん、どうぞ」

そしてパラパラと過去問の中身を簡単に確かめる。内容としては高校一年生の初めの中間テストとしては申し分ない適切と呼べる難易度であろう。それが坂柳の印象であつた。

「白川くんもこの過去問を頼りに勉強されているんですか？　あなたほどの方であれば必要ない気がします」

「元々過去問のことは感づいてはいたけどさ、先輩に知り合いもないし、まあいつかなと思つてただけど、せっかく棚ボタでゲットしたんだからまあ、見ない手はないよね」
「それもそうです」

フフ、と坂柳は微笑む。

そして彼女は結論付ける、目の前の少年を何とかして自分の下に置かねばならないと。

口にしないだけで、教師が黙秘しているこの学校の隠された仕組みにも彼は気づいて
いるだろう。内容によつてはそれは今後の他クラスとの関係にも響いてくる。

自分の派閥にいいことが問題ではない。敵対している葛城勢力に加わることが坂
柳にとつては望ましくない展開につながってしまうのだ。

恐らく明日行われるという葛城派の勉強会でもこの過去問の存在を皆に明かし、そし
て葛城派からの勧誘もより一層強まってしまふのだろう。容易に想像できることだ。

「流石に他クラスに共有するのはやめておくよ」

坂柳の考えを見通すかのように白川は一言加えた。しかし彼の視点は本の文字を
辿っているままだ。もしかしたらただの眩きだったのかもしてない。

——— なんとかしてでも白川君を……、

彼女は策を練る。

目の前の少年を手に入れる方法を。

手に入れた後にどのように動くべきかを。

——— 『彼』に勝つには……

葛城康平の考察

「——これが一学期中間テストの結果だ」

担任の真嶋教師は幾枚かの模造紙をAクラスの生徒全員が確認できる黒板に張り出した。テストの点数の順位表。高校生最初の大型のペーパーテストということもあり、ゴクリと喉を鳴らせながら顔をこわばらせ睨み続ける生徒も少なからずいる。

結果は、どの科目も上位は100点に数欄を埋められており、最下位を見ても決して低い点数ではないと言えよう。因みに、全教科満点を取得したのは坂柳、白川の二名である。

「うげ——！ まじかよー！」

生徒の一人が嘆きだした。

全科目の合計点が最下位だった生徒らしい。学年で最も評価されるAクラスのおいて決して勉強が得意な方であるというわけではないという自覚はあるのだが、まさ

か他の39人に劣るとは思いもしなかったのだろう。

それはつまり何を裏付けているのか。

「なんだよお前、過去問見なかったのかよ?」

「過去問!?! なんだそれ、そんなものがあつたのか!?!」

「勉強会で葛城が配つてただろ。あ、お前はいなかつたんだっけ」

この生徒は今も坂柳派と葛城派のどちらにも属していない。白川が過去問を共有したのは両派閥のトップ二人のみ。結果的に過去問の入手に成功した生徒が白川以外にいなかったため、リーダーの二人に配られた生徒のみが過去問という裏技の恩恵を受けていた。

「お手柄ですね、白川くん」

「そうですね」

隣の席に座る白川を坂柳は称賛する。その言葉を真摯に受け止めた様子でもない白川は、喜びに満ち溢れたクラス全体をボーッと眺めていた。

今回のテストで赤点を取ってしまい、退学という処罰を余儀なくされた生徒はAクラスにはいなかった。後日分かったことだが他クラスにも脱落者はいないらしい。

しかしここは天下のAクラス。退学を避ける為に勇み励むという低レベルな志を持つものなどいなく、より高みを目指し点を稼ごうとするものばかり。今回は過去問を参

考にする生徒ばかりで、結果は9割越えのハイレベルな団栗の背比べを繰り広げる生徒ばかりになってしまった。

「中間テストも終わったことですし、この後私たちは打ち上げをしようと思っ
ていますが、白川君もよかつたらご一緒しませんか？」

派閥には入ってはいないものの、今回のお見事なテスト結果は白川の功績だ。それを
知る者には実際には限られているのだが、打ち明けければ歓迎こそされども邪険には扱わ
れないだろう。そもそも彼を嫌う人自体このクラスにはいないのだが。

「そうだな、じゃあ——」

「白川」

二人の話を遮るように、白川の前に一人の男が訪れ声をかけた。

葛城康平。Aクラスにおいて、坂柳と双璧をなす、大柄な男子生徒。病気により若く
して頭髮を失ったことが元来の強面を助長してしまっているが、その実は慎重な性格で
良識ある真面目な生徒だ。その本質のおかげで人を引き付け派閥を形作れているの
かもしれない。

「すまんが話がある。放課後少し時間を貰えないか？」

ほんの一瞬、葛城は坂柳を眼球の動きだけで一瞥する。二人が何か会話していたこと
には気づいていたのかもしれないが、構うことなく要件を伝える。白川は隣に座る先客

に無言で首を向けるが、どうぞご自由にとでも言いたげなほほ笑みがそこにはあった。「うんよ」

坂柳が許すなら。葛城はその胸中を知りはしないが、拒絶されなかったことに安堵したのか口元は微笑んでいた。



「坂柳と何か話していたのか？」

「いいよ、大したことじゃないから」

本心でそう言ったわけではない。葛城の気遣いが途切れるようにそう答えただけである。

二人がいるのは階段の踊り場。教室では話を誰かに盗み聞きされるのを危惧したため授業が終了してから移動したのだ。時折誰かが通る場であるのは変わらないが、話の筋を理解できるのはわざわざ立ち止まって聞く耳立てるような不審者ぐらいだ。

「まずは、中間テストの件だが、白川がくれた過去問のお陰で事なきを得た」

「そうか、それは良かったよ」

「と、言いたいところなんだが、」

神妙な面持ちで葛城はカバンから紙の束が入ったクリアファイルを取り出した。

「これはどういうことなんだ？」

取り出した過去問は二束。片方は先日の勉強会で白川が葛城に託したものだ。

そしてもう一方は、

「白川は過去問をオレと坂柳に共有してくれた。それは感謝していると仰りたい。だが、オレに渡した過去問と坂柳に渡した過去問の内容が一部分だが違っていた」

「……………」

「実際に中間試験を受けて分かったことだが、オレが受け取った過去問は理系科目の内容に、坂柳が受け取った過去問は文系科目の内容に手を加えたんだな？」

「そうだよ」

隠すことなく戸惑うことなく白川は即答した。小さく口元を微笑ませながら。

「何のためにこんなことを？」

クラス全体を陥れるためなら問題全てを差し替えているはずだ。しかし白川がそんな卑劣な愚行をする人物ではないことは葛城も重々理解している。そもそも手を加えられたのは2パターンとも一部の教科の中の更に一部分。

例え過去問に頼りそれ以外の対策を練っていない者がいようともし決して退学となる赤点ラインまで落ち零れてしまうことはなかっただろう。

「よく気付いたね」

葛城は目の前の男が素直に感心しているように見えた。

過去問と実際のテストに差があったとしても白川の小細工には本来は気づくことはないはずだ。出題内容が全く同じであろうという都合のいいことを期待するのは余りにも早計すぎる。

葛城のように2パターンの過去問を入手していなければ、疑念を抱かず何事もなくてスト終わりの息抜きを満喫しているだろう。

「完全なスパイというわけではないが、坂柳派の中にも情報を共有できる者がいるだけだ」

対立する勢力に打ち勝つためには情報が必要である。内通者を用意することなどさして珍しい手段ではないだろう。実際には、仲良くとまではいかないが派閥が違えどある程度コミュニケーションをとれるクラスメイトがいるというだけなのだが。

「何時気づいたの？ 二種類あるってこと」

「テストを受ける直前だ。皆を焦らせまいと黙っていたから、それを知る者は殆どいない」

まさか過去問の内容が間違っていると知れば、精神的に不安定になってしまう。それでは解ける問題も解けなくなってしまうだろう。

白川が両派閥に過去問を配つたのはテストが行われるの二日前。日数もなかったため気づくのに遅れてしまったのだ。

「もう一度聞く。なぜこのようなことをした？」

白川は坂柳派にも葛城派にも属していない。であれば坂柳派に過去問を共有すること自体を止める権利などは勿論誰にもない。それは葛城も気に掛けてはいない。

しかし白川が行ったのはある種、クラス全体を裏切る行為。であればクラスメイトとして聞く権利はあるはずだ。

圧力ある表情と声色で葛城は白川に問いたです。拳や蹴りが出てくることはないだろうが、その迫力たるや、波の高校生らしからぬものがあつた。

しかし、白川には動揺はない。表情が変わることもなければ冷や汗など一滴たりとも出てきていない。

「なぜだと思つう？」

問いに対して白川が返したのは問いだった。物怖じすることなく、娯楽に興じるような笑みを小さく浮かべながら。

葛城は眉間に皺を寄せる。目の前の少年が何か意図があつてこのようなことをしたのは間違いない。ただの悪戯にしては少々手間がかかりすぎている。

そして考える。この2種類の過去問を用意することで得られるものを。

まさか手を加えていないプレーンな過去問を独り占めして、クラスメイトから信頼を得つつも自分だけ満点を狙おうとしていたわけではないだろう。現に坂柳も白川と同様に満点を叩き出している。そもそも白川は過去問が無かつたとしても点数は変わらなかったのではないのかとさえ考えてしまう。

思いつく意図の一つは、2つの勢力の規模の確認。

葛城派は理系科目、坂柳派は文系科目に手を加えられていたということは、個人差はあれど比較的理系科目の点数が低い者は葛城派、文系科目の点数が低い者は坂柳派、そして文系理系ともに差のない点数を獲得しているものは両派閥に何らかの形で繋がっていることが考えられる。そして今回のテスト結果で下位になってしまったものは白川と同様どちらの派閥にも属していないことが浮き彫りになってしまった。

それを知ることによって白川はどうしようというのだろうか。比較的仲のいいクラスメイトがどちらに属しているのか確認して派閥を選ぼうというのだろうか。いや、白川が特別に仲のいいクラスメイトが誰なのかは葛城には見当もつかない。

というか、そもそもどちらかの派閥に入ろうとしているのかすらも怪しい。であれば、

ほかに考えがあるとすれば、

「……まさかとは思うが、」

葛城は浮かんだ一つの仮説を述べる。それを聞いた白川の笑みが、少し強まったような気がした。



「過去問を二種類用意していた?」

「ええ、私がいただいたモノと、葛城くんの派閥に配られたモノは少しですが内容が違うものでした」

放課後、学校の敷地内にあるファミレス。

坂柳派はここでテストの打ち上げを行っていた。殆どの生徒が騒ぎに騒ぎ、かろうじてほかの客の迷惑にならない程度に盛り上がっている中、端のテーブルに座っている坂柳は彼女の右腕となって日々動いてもらっている神室真澄に静かにその事実を伝えていた。

坂柳にも葛城と同様、敵情視察が可能な駒もとい仲間がおり、その生徒を通じてもう一パターンの過去問の存在を確認したのだ。

「……まさか正しい過去問を独り占めしておいしい思いをしようとしたわけじゃないわよね」

「ええ、彼はそんな小さなことをする方ではありませんから」

そう確信する坂柳は紅茶に口を付けた。

白川の単独行動を楽しみながら小悪魔的な笑みを浮かべる。そんな坂柳の表情が、神室には気味悪く感じてしまった。

「なんでそんな訳わかんないことをしたのかしら」

「なぜだと思えますか？」

間を空けずに坂柳は神室に問いかけた。まるでその言葉を待ち望んでいたかのよう

に。
「分かるわけじゃないじゃない、私なんか」

というよりは、考えるのが面倒だと言いたげなしかめっ面だ。回りくどいのは嫌。聞けることはさっさと聞きたい。なぜテストも終わったのに考え事を与えられているのだろうか。

「おそろくですが、」

カチャリ、とカップを受け皿に置く。

「意味などないと思われれます」

「はっ。」

坂柳の結論が神室には理解できなかつた。

「いえ、白川くんが今回の小細工をしたことには意味があるでしょう。しかし、過去間に手を加えたということ自体には意味がないということですよ」

「いや、何言ってるのか余計に分かんなくなっているんだけど……」

「神室はその二つに差があるように思えない。というかなぜ打ち上げでこんなにもお固く議論しなければならぬのか、バカ騒ぎはしたくはないが、連日のテスト勉強で溜まったストレスを浄化させる程度に盛り上がりに参加する権利はあるはずなのだが。」

「つまりですね、明らかに怪しく、疑念を抱かざるを得ないようなことをして、私たちがどこまで考えるのかを試しているということですよ」

「……知恵比べみたいなもの？」

「その通りです。たった今、私が真澄さんに問いかけた、『なぜだと思うか?』というのが彼の今回の行動の肝なのでしょう。私たちは、彼に試されていたんです」

「……、」

「なんとも性格の悪い。目の前の少女に匹敵するのではないか。白川がそこまでする人物だとは神室には思えなかった。」

「神室の中での白川というクラスメイトの印象は、のんびりとしたクラスの傍観者である。何かで中心に立とうとする意志など一度たりとも見たことがない。ただ、テストの点数は坂柳と並び学年トップであり、見た目も良いから女子からの人気もかなり高い。」

まあ、味方について損はないから、坂柳と葛城が勧誘に勤しんでいるのも理解できなくはない。

「今後私たちや葛城くんたちがどう動くのかも、彼は楽しみにしているでしょうね。派閥に入っていないなかったせいで過去問を手に入れられなかった生徒は、直ぐにでもどちらかに入ることでしょう」

「良かったじゃない、白川のおかげで仲間が増えるかもしれないなんて」

「本命はあくまで白川君です。他の残っている方々は居ても居なくても変わらない、勢力の規模を少し拡大するための材料にしかありません」

「あつそ」

神室は一つ、ため息を吐いてからココアを一口飲みこんだ。

目の前の少女は知らないが、一人で白川に近づいているところを目撃情報が多数あり、二人は恋愛関係になっている、もしくは坂柳が白川を狙っているのではないかという噂が立っているのである。クラス内の事情を知らなければ二人は華やかな未来ある男子と女子でしかないのだから。



「白川、今回のような自分勝手な真似は今後はしないでくれ。不必要な危険をクラスの皆に与えたくはない」

「ん、いいよ。約束する」

あまりにも軽い口調で快諾してくるものだから張っていた気も緩んでしまう。しかし不思議と葛城は信じていることができた。

葛城自身は知る術を持たないが、彼の考察は坂柳のものと概ね一致していた。葛城の考察と白川の意図が一致しているのであれば、今後同じような企みを繰り返すことは出来ない。というより意味がない。

話した結果、白川にはイエスともノーとも取れない返事が返ってきたのだが、葛城にとってはそれだけでもある程度の納得が得られたのだ。

白川が今回行ったことはクラスにとつて迷惑といえど否定しきれないが、彼はクラスに後遺症を残すようなことは決してしない。坂柳のように、万が一にでも取り返しがつかないことになる可能性があるようなことを彼が行うことはないだろう。

「そうか、それは良かった」

「もういいか？ 坂柳にテストの打ち上げに誘われているんだ」

「時間を貰ってしまったってすまなかった。そうか、坂柳に……。俺も白川を打ち上げに誘おうとしていたんだが……。弥彦も勉強を教えてもらったことを感謝していたからな」

「戸塚にはスマンと言っておいてくれ。メシぐらい何時でも行くからさ」

基本的に白川が誘いを断ることは今までない。あるとすれば今回のように先に誰かに予定を抑えられていた場合だ。

「……話は変わるが、そろそろオレの仲間に加わらないか？ 白川を歓迎しない奴はないと断言してもいい。オレもお前が来てくれればかなり心強い」

「考えておくよ」

何度聞いたことがあるか分からないセリフを最後に、白川は階段を降り始めた。

見えなくなるまで背を見ていた葛城は、左手を腰に当て、右手で頭を掻いてため息を吐いて、呟いた。

「……………残念だ」

それが本心であることは、隠しようもなかった。

綾小路清隆の交友

オレの名前は綾小路清隆。

学力は全教科凡庸な点数しか取れない程度で、体育の授業では良い意味でも悪い意味でも注目されることはない、至って普通のどこにでもいる1―D所属の男子高校生だ。

というのはオレの偽りの姿であり、実情としてはオレは幼少からホワイトルームという特殊な環境下で特別な教育を受けていたことにより常人では決して届かない知力、運動神経を持っているが、それら能力は隠して過ごしている。オレの正体を知る人物はこの学園にはいないはずだ。

……勿論このような自己紹介は誰にも出来ない。話そうものならその瞬間から中高生特有の健康的な痛々しい病に侵されていると断定されて、今以上にオレに言葉をかけてくれる者は少なくなってしまうだろう。

「テストのたった一点を10万プライベートポイントで購入。……数字的には割高に見

えるのかもしれないけど退学を消せたと考えれば破格のお値段なんだろうな」

「ああ。おかげで手持ちのポイントは何と無くなくなってしまったがな」

自分のクラス内でも活発にコミュニケーションをとっていないせいとか、悲しいことに端末に登録されている連絡先の数は多くはない。クラスで親しいヤツを何人かピックアップしろ、と言われたら沈黙が続くだろう。だが、そんなオレでも他クラスに友人と呼べる者ができた。

白川悠里。

クラスポイントを4月の一か月間で1000ポイント全て消滅させてしまったDクラスとは違って、減点をたった60ポイントで抑えた歴代でもトップクラスに優秀なAクラスの生徒で、クラスの女子たちが話している中でその名前を聞いたことがある。

なんでも現在までオレたちが受けたペーパーテストの全てで満点を記録しているらしく、その上限に到達した成績と優れた容姿が女子たちに人気らしい。

加えて自己陶酔の気質もなく穏やかな印象で、話してみれば肩が凝ることもなく親しみやすさが伝わってくる。同性としても好感が持てるまではそう時間もかからなかった。

「生活に困ってるならポイント貸そうか？ 嫌味をいう訳じゃないけど、Dクラスは苦労してるんでしょ？」

「……魅力的な提案だが、遠慮しておこう。俺だけが他クラスの生徒に世話になるわけにはいかないからな」

「何人かいると思うけどな、ポイント借りている人」

そうかもしれない。5月にも首尾よく10万ポイント貰えると思い込み、4月終了時点で手持ちポイントを使い切ったせいで今も手持ちポイントがゼロに近いヤツが何人かいた気がする。この学校は金銭の役割を受け持つポイントなどなくとも生きていけるようになってはいるが、貧しさに耐え忍べるかは個々による。4月中に購入した物品を誰かに割安で売り、その場しのぎだがポイントを稼いでいる者も見たことがある。

オレは散財しない性格だったのが功を奏した。今のところは支障はない。

「本当に困ったときは、もしかしたら頼るかもしれないな」

オレと白川が出会ったのは入学して2週間ほどたった時のこと。図書館で暇つぶしに役立つ小説本を物色していた際に、興味深いタイトルが背表紙に刻まれた一冊を見つけ手に取ろうとしたところ、白川も同時にその本に手を伸ばしてきており、俺の手とぶつかった。

異性であれば彩鮮やかな恋が幕開けたのかもかもしれないが、悲しいかな、互いに同性愛などない同性。その場では本の譲り合いにはオレは負け、その後オレの目の前から立ち去った白川が何の本を手にしたのかは知らない。

その後日も度々図書館で見かけることがあり、学校内でもすれ違う時には軽く挨拶する程度にはなつた。

もしかしたら友人というのはこうして自ずと増えていくのかもしれない。人間関係とは実に興味深いものだ。

そして今、オレ達は全裸で横に並んでいる。

……誤解しないでほしい。さつきも言ったがオレ達は両者とも同性愛の気はない。場所が場所なのだ。ここは学校の敷地内にある銭湯。寮から離れているところにあるせい、賑わっている様子はなく、今はオレ達以外に客はいないようだ。

待ち合わせをしていた訳じゃない。放課後の夕方にオレは一人でここを訪れ、カラダを洗いサウナに入ったところ、先客として腰掛ける白川に出くわした。それから10分ほどし、俺たちは湯舟に移動している。

「いつでも言ってくれ」

図書館で同じ本を手を取ろうとしたことから測るに、白川とオレは趣味が合うのかもしれない。そして偶然にも銭湯で出くわすように、嗜好が噛み合っている。これはもう、友人といつても差し支えないのではないだろうか。これで誰かとは言わないが、誰かにポツチだと馬鹿にされることは無くなる。

こうして様々な場所で行くわしたこともあつてか、白川とはなぜか他人とは思えな

い。いや、女子に人気のこの男に対してそのような評価をしていれば非難は免れないだろう。だがどこか似ている気がしてならない。半開き気味の眼とかそっくりではないだろうか。今、白川は鼻から額にまで手拭いが被せられて窺えない状態ではあるのだが。

きつと白川も、隣の席の女子生徒に無遠慮に振り回されているのだろう。根拠はないが、そうに違いない。

「それにしても、ポイントにはまだまだ使い道がありそうだな」

足を湯の中で音が立たない程度に揺らしながら、白川はそう呟いた。

Dクラスは赤点を取れば退学になるという中間試験を死に物狂いで乗り越えようとしていたが、純粋な学力ではどうも危ういクラスメイトが何人かいた。そこでオレ達は先輩から過去問を購入することに成功し、それをクラスに配布することで赤点を回避しようとしていたのだが、須藤は英語の過去問を覚えきることができなくて健闘空しくも赤点ボーダーまで一点届かなかつた。僅か一点、されど一点。担任である茶柱から下された判決は退学の二文字。

オレと堀北が須藤の足りない一点をプライベートポイントで購入することにより、須藤の退学を取り消すことに成功した。

何故他クラスの生徒である白川が、オレ達がプライベートポイントでテストの点数を

購入することで退学を回避したというDクラス内でも全貌を知る者が少ない事柄を知っているのかという、オレが白川に話したからに他ならない。

何故話すことになったのか。白川がその事実を的中させたからである。

『そういえば綾小路君、Dクラスの一人が赤点を取ったのに退学にならなかったって聞いたんだけど、ポイントでも使って点数を引き上げたりしたの?』

先程サウナで雑談していると何の気なしに平常運転でこんなことを聞かれた。

あまりにも大当たり過ぎてサラッと肯定してしまった。少しだが、後悔している。

Aクラスの生徒というのは、皆ここまで察がいいものなのだろうか。だとしたら堀北がAクラスにまで上り詰めるために粉骨碎身しようとも難しい気がしてきた。白川の学力が学年内でも突出していることから、そうではないとは思っているのだが。

この男には他にも驚かされたことがある。

白川はオレと同じクラスに在籍している、高円寺六助と友人であるということ。

小学校や中学校など、学歴に同一な項目はないのだが、なんでも互いの親が学生時代から友好関係にあり、それを引き継ぎ、所謂幼馴染という関係にあるらしい。

この事実が、プライベートポイントによる点数の購入を嗅ぎつけた。

須藤が赤点を取り、退学を言い渡されたのはテスト結果発表直後の教室でのこと。その場には勿論クラス全員が着席しており、聞き逃した者などいない。しかし須藤は結果

として退学にならなかつたことは須藤が教室に居続けていることが何よりも証明しており、これもまたクラス全員に周知されている。

高円寺も例外ではない。須藤が退学を言い渡され、そして退学してはいない現状を奴が白川に告げたのだろう。雑談程度に、さして重要事項として扱うことなく。

そして白川は、高円寺から過去問を貰ったと聞いた。

高円寺はクラスの生徒とはオレ以上に交友関係が壊滅的ではあるが、上級生の女子生徒にはそうではない者達がいるらしい。ヤツは、銀河の中心は自分だと言わんばかりの唯我独尊自己中心的エゴイストではあるが、『高円寺コンツェルン』の一人息子という血統に惹かれる者もいるのだろう。

そんな高円寺は、望んだからなのか、好意からなのか、先輩の女子生徒から中間テストの過去問を貰い受け、自分には必要ないと見立てて白川に無償で譲つたらしい。自分のクラスメイトが如何に赤点回避に苦しんでいるのかは聞く耳立てずとも教室に居れば知れたものの、気にも留めずに旧知の仲である白川に恩を売った。いや、高円寺からしたら恩を売ったとも感じていないだろう。ただの気まぐれ、その譲渡のことももう忘れていくのかもしれない。

白川がDクラスの他の生徒にこの事を話して広まれば、今まで以上に冷ややかな目で見られるだろう。そして高円寺はその視線を今までと変わらず右から左へと受け流し

続けるに違いない。



存分に湯を堪能し、身も心もリフレッシュしたオレ達二人は衣服を身に着け脱衣所から出た。

温まった体にはロビーの空調が一層心地よく感じる。

「おっ」

セコンドに煽り立てられるボクサーのように頭にタオルをかけてはいるが覇気など感じられない白川がとあるものを見つけた。

銭湯ならどこにでもあると噂の牛乳の自販機。コーヒー牛乳やフルーツ牛乳もある。

「ジャンケンだな」

そう言つて白川はオレを誘う。

石や鉄や紙で戦う人類史上最多開催数であろう競技、ジャンケン。日本人の大多数にとっては休日の終わりに一人の女性がテレビの画面の中で行うのを見るのが通例らしい。勝てば一週間の幸せに過ごせるとかなんとか。

この場においては負けた方が勝った方にも風呂上がり牛乳を奢るというルール。

実に友人同士らしい所業だ。断る理由などない。

果たして、白川は何を出すのだろうか。最初に出す手でその人物の性格を分析できるという話を聞いたことがある。深層心理に関する知見があれば勝率は三分の一から僅かながらでも上昇する。また、日本のジャンケンは『最初はグー』という掛け声で始めるのが典型だ。それによつて否が応でもグーを一度出すため、勝負の一手目ではグーを出す者が他の二種に比べて少ないという研究結果がある。つまり、最初はチョキを出すことが勝敗の期待値が一番高い。

……いや、こんな論理を脳内で展開するのはTPOに適していない。何より友人っぽくない。

友人である白川とジャンケンをするだけだ。特になにも考える必要はない。衝動的に手を決めるのが正しいのだろう。

オレが出した手はパー。

白川が出した手はグー。

オレは勝利を掴んだ。少し残念そうな白川はオレに何を飲むのか聞いてきたため、コーヒール牛乳を注文した。白川はプレーンな牛乳を選んだようだ。

冷えた瓶を貰ったオレは白川と同時にふたを開け、口を付けて傾ける。人のポイントで飲む牛乳はとて旨かった。

そしてオレは確信する。やはりオレと白川は間違いなく友人といえると。堀北にも異論は言わせない。



高度育成高等学校は学校という名目上では当てはまらないほど広大な敷地を有している。

入学してからは卒業するまで敷地の外に足を踏み入れることも外にいる者と連絡を取ることも許されていない。しかし衣食住を全て満たすべく、生徒の要望に沿うものをほぼ全て賄うためにも一つの町がオレ達の平日と休日を支えている。

休日ともなれば、週によって過ごし方はバラエティーに富むものではあるが、平日の登校から登下校までのルーティンはオレ個人のものに限らず他の生徒とも比べてもさほど差はない。授業は教室の個々の机、理科などは特別教室、体育は体育館やグラウンド、そして昼食は食堂やコンビニ、弁当を持参している者は教室や校舎内のどこかで摂る。

それだけ限られた空間で過ごしていれば、たとえ他クラスの生徒であれど、どこかですれ違う、見かけることは珍しくもないのだ。

中間試験に関する詳細が茶柱からクラス全体に通達されて間もない日、オレは隣の席の住人である堀北に昼食を誘われていた。

異性に食事を誘われるというのはどの年齢層であつても有意義なイベントになりそうではあるのだが、今回の場合については断言できる。怪しい。怪しすぎる。

オマケに昼食を誘ってくるだけではなく、奢つてもくれると言っている。どのメニューを頼んでもいいらしい。

堀北鈴音という女子生徒の性格を考慮すれば相手が一方的にオイシイ思いをするオハナシを持ち込むわけなどない。餌を与えるだけの悪魔などいない。最悪なケースとして五臓六腑を抉り取られることまで覚悟したオレは、最後の食事として普段頼むことのないちよつと贅沢な定食を注文させていただこう。まあ、勉強会に協力しろとかを要求してくるのだろうか。

列に並んで順番が回ってくるのを待っているオレは何気なく食堂を見渡した。

いつもと変わらぬ大繁盛を伺える。豊富なメニューと手ごろな価格は弁当を早朝から用意する手間を省かせ、加えて睡眠時間を延長させてくれる。

まあ、自炊した弁当の方が安価ではあるのだが、それを下回る価格のメニューである山菜定食もここにはある。こうして席を見渡すと、結構山菜定食を注文している生徒が

少なからずいることがわかる。不機嫌顔を隠さずに食べているのを見ると、ポイントの節約を心掛けてしまう。オレ達Dクラスは他人事ではないから、肝に銘じておこう。

人の波の中に見知った顔を発見した。白川だ。

白川もオレと同じく女子生徒と二人で列に並んでいる。今は最前列におり、もうすぐ注文したものが手に入るところだ。

恋人だろうか？ 堀北のように仏頂面をデフォルトにしていることもなく、笑顔で白川とお喋りしている。実に微笑ましい光景ではないか。白川は良いやつだからな、彼女の一人や二人いてもおかしくない。二人いたら良いヤツではなくなるが。

定食を受け取った白川達は、列の先頭から席へと向かっていく。白川が片手に定食が並べられたトレーを一つずつ、両手で二人分運んでいるのは不思議に思ったが、隣に歩く女子生徒を見たら合点がいった。背が高い白川と並ぶと小柄なのが際立ってしまった。その少女は、怪我でもしているのだろうか、杖をつきながら歩いていた。歩き方を見ると、杖の扱いにも慣れていることが推察されるが、手にモノを持って歩くのは難しいのだろう。嫌な顔せず手間とも思わず運んでくれる白川と並ぶ彼女は嬉しそうに歩いている。

「何をニヤニヤしながら見ているのかしら、控えめに言つて気持ち悪いわよ」

白川の善行に笑みを浮かべてしまったのだろうか。しかしその堀北の感想は忌避感

を覚えてしまう。

「ニヤニヤなんてしていいない。ただ他クラスの友人を見つけただけだ」

「あなたに他クラスの友人なんているわけがないでしょう？ 同じクラスの中にも友人なんていないのに」

解せない。同じ人間とは思えない指摘を受けたオレの眉間に皺が寄ってしまったのは仕方がないことだ。

「オレにも友人ぐらいいはいるさ」

「それは綾小路君だけがそう思っていて、向こうからしたらあなたのことなんて何とも思っていないんじゃないのかしら」

「そんなことはない」

白川、ここにきてこの女に何とか言ってくれないだろうか。……いやまさか堀北の言う通り俺だけが勘違いしているんじゃないよな？

白川の方を見ると、5、6人で席について談笑しながら昼食をしている姿が見えた。恋人と二人で来ているというのはオレの勘違いらしい。白川と共にいた少女だけに限らず、他の女子生徒とも話に花を咲かせている。ただ白川が食べたいメニューとあの少女が食べたいメニューが同じカウンターで受け取れるというだけだったから、ついでに白川が運んであげていただけということらしい。

……いやまさかオレ達が友人であるというのも勘違いじゃないよな？

櫛田桔梗の接近

私の名前は櫛田桔梗。

学園中の生徒全員と友達になることを目標としている1—Dの女子生徒だ。

幼いころから色んな人と交友を深めることが大好きで、高度育成高等学校に入学してからも新しい友達が沢山できた。Dクラスは4月一杯でクラスポイントが全部無くなってしまおうという非常事態になっちゃったけど、皆が力を合わせれば他のクラスにも対抗できると私は信じている。そのためにも、まだまだ仲良くなれていないクラスメイトとも友達にならないとねっ！

というのはいくらかの嘘である。実際の私は承認欲求に溢れた女の子。中学の時には上辺では今と同じくクラスの皆と仲良くして笑顔を毎日振りまいてはいたが、陰では皆を見下し、嘲笑し続けていた。みんなに信用され、私だけに秘密や相談事を持ち掛けてくるのにはとてつもない快感と優越感を得てはいたが、頼りにされて愚痴を聞かされてば

かりではストレスも溜まってしまふ。そこで私は匿名のブログで悪口を書き連ね続けることでストレスを発散していたのだ。そこまでは良かったんだけど、ブログの存在をクラスメイトにバレてしまい、逆上されてしまった。暴言暴力を向けられた私は愛想が尽きてしまい、ブログにも書いていない皆の真実、誰が誰を嫌っているのかみたいな、意識を私以外に向けられるようにありとあらゆることをぶちまけた。

結果、クラスの皆は取っ組み合いや口論が激化して、教師たちにも收拾のつかない阿鼻叫喚へと発展した。あれは見ものだったなあ……。

仲睦まじいクラスを一日で崩壊させてしまった女の子。それが本当の私。

……勿論こんなことは誰にも言えない。言えば今仲がいい子ほど私から遠ざかり、学校に居場所は無くなってしまふだろう。クラスのバカな男子たちの私の主にカラダを見るイヤラシイ視線はいつになつても不愉快極まりないけど、クラスのアイドル的なポジションを守るためには我慢するしかない。



「やつぱりクラスポイントが低いままだと、休日もまともに遊べないよね」

「そうだよねー。来月はポイントが増えていくればいいんだけど」

クラスで仲の良い心ちゃんやみーちゃんがそう言つて不満を露わにした。

今は休日の夕方。一緒にケヤキモールで遊んだ帰り道。寮までそんなに距離がないところを歩いている。

普段の授業態度や学校内外での態度で毎月配布されるポイントが減らされることなんて知らなかったから、高校生になって浮かれたクラスの皆は好き勝手やったせいでクラスポイントがなくなり、5月に配布されたプライベートポイントはゼロ。クラスの皆が節約を余儀なくされている。

「皆で頑張ればきつとクラスポイントも他クラスに負けないくらい上がるって！」

私はそう言つて二人を元気づけようとする。

本心では正直DクラスがCクラス以上に上がるのは難しいと思つている。実力で入学時にクラス分けされた結果、出来損ないと決められて集められたのが私たちDクラスの皆だ。勉強会も何とか形になるよう私が力を貸したけど、どれだけ非常事態になつていたかもわかつていなくて好き勝手単独行動する馬鹿ばかり。何とか過去問をポイントを犠牲にすることで先輩から手に入れ、結果的に退学者を一人も出さずに済んだけど、この調子ではいくら何でもDクラスに希望はない。

プライベートポイントが少ないのは、一人の女子高校生として私も辛いところがある。せつかくの休日にも思う存分楽しむことができずに、何か嗜好品を買おうと思つて

も今後のことを考えて一度ブレーキをかけてしまう。

他のクラスの子達は好き勝手ポイントが使えてとても羨ましい。

「いいなあ、ほかのクラスは。ポイントが沢山あつて」

みーちゃんも同時に同じことを思っていたらしい。心ちゃんも表情がどこか曇っている。

この学校では無料で販売しているものが沢山あつて、ポイントが無くても何とかなるようにはなっている。でもモノの質にはどこか不満があるし、何より無料コーナーに通うのは惨めな気持ちになってしまう。

特にAクラスは5月になった時も殆どクラスポイントが減っていないかった。定期的な贅沢しても問題はないほどの――

「!」

そんなことを考えていたら、一人の生徒が視界に入った。その人物は帰り道沿いのコンビニの中にいた。

思わず表情を変えてしまいそうになるが、ぐつと堪えて二人に気づかれないようにする。

そして私は違和感なく二人に一言告げた。

「私ちよつとコンビニに寄つてから寮に帰るねっ!」

「あ、そうなんだ。じゃあここで開きだね」

「じゃあね桔梗ちゃん、また明日!」

笑顔で挨拶して、二人は私を置いて寮に帰っていった。

……良かった。二人のどちらか一人でも付いてくることが無くて。パツと思いついた作戦がその時点で終わってしまうところだった。

そして私は一人でコンビニ二へと入っていく。やる気のない店員の声と適度に調整された空調が出迎えてくれた。

雑誌コーナー、お菓子コーナー、お弁当コーナー、飲料コーナー。コンビニの中を一通り眺めながら、お目当ての人物の傍に不審に思われないためにも直視することを避けながら近づいていく。

180センチに届く背丈。黒髪のショートヘアに優しそうな印象を受ける整った顔立ち。

白川悠里くん。

Aクラスに所属している、結構有名な男子生徒だ。

女子高校生というのは茶目つ気溢れる生き物であり、入学直後に目ぼしい男子生徒を挙げ合い、ランキングの形を用いて様々なジャンルで評価していった。

その中で様々なランキングの上位に名を轟かせたのが白川君だ。勿論、良い内容のも

のだ。しかし今のところ、彼についての恋愛関係の浮ついた話は聞かない。

Aクラスについて、興味深い話を聞いた。

現在学年で一番優秀なAクラスは、その中でも特に優秀な坂柳さんと葛城くんの二人が各々の派閥を作り、クラスの生徒のほぼ全員がそのどちらかの派閥に入っていて内戦状態にあるらしい。一つのテストを乗り越えるために手と手を取り合うDクラスとは同じ学校とは思えないほど問題点のレベルが違っている。

そしてどちらの派閥にも入っていない生徒の一人が、白川君だ。

坂柳さんと葛城くんの両名は彼と親しくしており、そして彼が自分の派閥に加わってくれるよう、日々勧誘を続けていると聞いた。

この事実を利用しない手はない。

白川くんを二人が狙っているということは、それだけ彼が優秀な人材であるということとを裏付けており、彼を手に入れた派閥はAクラスを統べることに限りなく近づく。つまり、彼に近づくことはAクラスの有望な派閥に近づくことに同義であると言える。

一日でも早く私の目的を達成させるためには、一人でも多くの有能な生徒に近づくことが必要だ。

私の目的、私が中学三年生の時にしたことを知っている堀北鈴音を退学させるためには他クラスの動きを知る必要がある。この学校は特殊だ。学校のルールも外の学校と

は全く違う。たった一回赤点を取るだけで退学になってしまうのがその一例だ。

なら、堀北鈴音を退学にさせるためにはまずはこの学校のことを知らなければならぬ。私は成績は優秀な方だ。でも一番なのかと聞かれたら残念なことにそうではないと断言できる。

だからこそ、私は人との繋がりを増やし、人を利用する。

白川君には其（胸）の内の一人になってもらおう。

「……………」

白川くんは一人コンビニの商品棚を見つめている。

彼がいるのはスイーツコーナーの前。甘いものが好きなのだろうか？ 人の好き嫌

いは知っておけば他の人との関わり合いで役立つときが来ることがあるので、忘れないようにしておこう。

どうやらどのスイーツを買おうか迷っているらしい。陳列された色とりどりのスイーツはどれもおいしそうだ。コンビニスイーツは時に侮れないほどレベルが高いものが突然出てきたりする。

そして白川くんは取捨選択を終えたらしく、一つの商品に手を伸ばした。たしか期間限定で販売されているロールケーキで、人気も高く売り切れることが多く、彼が手を伸ばしたものは最後の一つだったのだ。

私はそれを逃すことなく、素早く、しかし不自然さのないように私も同じものに手を伸ばした。

狙い通り、私の手と彼の手がぶつかる。

「あ」

白川くと私は同時に声を出し、手を引つ込める。

私の存在に気付いた彼はこちらに体を向けた。こうして傍によると彼の背が高いことを再認識することになり、私は自然と見上げることになってしまふ。

「ご、ごめんねっ！ 手をぶつけちゃって」

「いやこつちもすまん」

演技と悟られないように必至に謝る。白川くんは申し訳なさそうな顔をした。無表情な印象があつたが、思いのほか表情が豊かなのかもしれない。

私は上目遣いで白川くんの顔を覗き込む。

「あれ、もしかしてAクラスの白川くんかな？」

「そうだけど、どつかであつたことあるっけ」

「ううん、白川くんって有名だから一方的に知っているだけだよ」

「そうなんだ、なんか照れるな」

ハハ、と白川君は人懐っこい笑みを浮かべた。彼は背は高いが圧迫感はなく、距離感

を縮めやすく感じる。何でもこなす孤高の王子様キャラというよりは親しみを持ちやすいお兄さんキャラとでもいうのだろうか。

「私、1-Dの櫛田桔梗っていうんだ。よろしくね!」

「ん、よろしく」

そんなに悪いファーストコンタクトじゃないと思う。初めから無理に詰め寄って、却って鬱陶しく思われるのは避けたいが、この場の会話だけで終わらせるのも御免だ。

「あ、ごめんね。白川くんがこれを買おうとしたのに、横から手を出しちゃって」

元々私はこのデザートが欲しいわけではない。……いや、このロールケーキは美味しくてクラスの子に聞いたことがあって気にはなっていたけど、今回はそんなこと言っていない。食べたくはあるけど、それ以上に優先すべきは彼との繋がりだ。

「いいよこれくらい。オレ他のものにするから」

「ううん! 私こそなんでもよかったから!」

引き下がるわけにはいかない私は、同じ商品棚に並べられたモンブランを手を取った。

他の商品に決めてしまえば彼も引き下がってくれるだろう。

「だから私はこれにしようかなー」

「……そっか」

白川くんは当初の通りロールケーキを手にする。

「じゃあ、オレがそれも買うよ。譲ってもらったお礼に」

そして私が持つモンブランを取り上げてレジへと向かった。あまりにも滑らかな動きだったため、気づくのが一歩遅れてしまった。

あれ、こんなはずじゃなかったのに……。

「え？　だ、だめだよそんなの。わるいって」

「いいっていいって、気にしないで」

両手に一つずつスイーツを持つ白川くんは、私が止めようとしても構わずレジに向かってしまう。並んでいる人もいなかったから、コンビニの店員は間を空けずに流れ作業で会計を進めてしまっていた。

「袋は別でお願いします」

白川くんが指示をした通りに、モンブランとロールケーキはそれぞれ別の袋にスプーンと一緒に入れられた。

……彼が女子に人気である本当の理由が分かったかもしれない。

私がDクラスの生徒だからポイントに苦労しているのを不憫に思っただけで奢ってくれているという感じではなく、多分誰であつても同じように事を運んでいるのだろう。

店員には私たちが恋人同士にでも見えているのだろうか。白川くんとそういう風に認識されるのは悪い気はしないが、もし誰か知り合いにこの場を目撃されてしまえば今後面倒なことになりかねない。

高校生はちよつとした噂を火種にしていつの間にか大火事を起こしてしまうお年頃の生き物だ。人気のある白川くんが絡んでいると思わぬところに敵が出来るかもしれない。

……かといつてここまでしてもらつては断ることもできない。

支払いを済ませて店員から袋を二つ受け取つた白川くんは、そのままコンビニの出入り口に向かう。申し訳なさそうな顔をしながら私は彼に続いていくと、袋の片方を渡してくれた。交換するかのように私は彼に感謝の言葉を述べる。

外に出た時にはもう日が殆ど沈んでいた。白川くんも今日はもう用事もないらしく、寮への帰路に就く。私もこの後は寄り道するつもりはない。そもそも帰るつもりだったところで白川くんを見つけて今に至るのだから、他に用事があるわけはない。この学校は不思議なことに男女同じ寮に住まわせているから自然と同じ道を歩くことになる。

寮までの道のりでは白川くんのお喋りを楽しんでいるように見せつつも、少しでも彼やAクラスの情報を集めようと所々で問いを投げかけた。新しい使える情報は残念なことに入らなかつたが、話してみてわかつたことがある。彼は女の子慣れしてい

るとは少し違う。老若男女を問わずに一定の敬意を持ち、適切な距離感を保つことで人を惹きつける気質だ。いや、女の子慣れはしているのかもしれない。いつも鼻の下を伸ばして女子とのお近づきを狙っているDクラスの3馬鹿とは大違いにもほどがある。彼らには白川くんをどうか見習ってほしい。

「じゃあね櫛田さん、また今度」

寮は女子が上の階に住んでいるため、白川君がエレベーターから出ていくのを私が見届けることでお別れになる。

小さく手を振ってから去っていく彼の背に向かって、ドアが閉まるまで私も手を振った。

「あ、うん。ホントありがとうねっ白川君。また今度お礼させてねっ!」

計画とズレてしまったのを少し反省する。でも結果的に白川くん知り合いになれたのは大きな事だろう。コンビニで奢ってもらったことはお礼という形で次に彼に近づくときに役立つことになる。

今日のところは買ってもらったモンブランを美味しくいただくとしよう。

「……………あれっ?」

自分の部屋に入って袋の中を覗いて初めて気が付いた。

私が白川くんから受け取ったコンビニの袋の中に入っているのは、私が後から選んだ

モンブランではなく、白川くんが食べようとしていた、あの時最後の一個だけ残っていた大人気の期間限定のロールケーキだった。

「……………もう」

私ともう少しでも真面目な女の子だったら、彼のことを好きになっていたかもしれない。ロールケーキは噂通り、とても美味しかった。

あ、白川くんに連絡先を聞くの、忘れてた……。

一之瀬帆波の信頼



「白川悠里です、よろしくお願いします」

中学三年生になって1か月ぐらい経った時、彼が私の中学の私のクラスに転校してきた。

当たり前のことかもしれないけど、転校生というのはどの時期に登場してもクラスの全員に注目される。受験生になったことを自覚しろと先生たちにも口を酸っぱくして言われ始め、授業一つとっても無下に出来ないと意識してしまうほどのちよつと居心地の悪い緊迫感が出てきた私たちにとって、彼の登場は息抜きとして浮つけるイベントになっっていた。

それに、彼の自己紹介は私たちの興味をかきたてるには十分すぎる内容だった。

なんでも、私たちの中学校に来るまでは親の都合で世界中を転々としていたらしく、

日本で暮らしたことが殆どなく、今までの人生の大半は欧米で過ごしてきたらしい。因みに両親は共に日本人なんだって。

好奇心旺盛な中学生には見過ごす選択肢なんてあるわけもなく、朝のホームルームが終わって1限目が始まるまでの僅かな時間でも彼はクラスの子達から時間の限り質問攻め。授業と授業の間も質問攻め。放課後になっても彼の周りから人の輪が無くなることはなかった。

テレビでしか見ないような外国の建物を実際に見た感想、聞きなれない名前をした外国の食べ物の味について、日本に居たら経験できないような外国の文化の事。白川くんはどんなことでも丁寧に受け答えしてくれていた。

それに、白川くんみたいな人を眉目秀麗っていうのだろうか、担任の先生に連れられて初めて教室に入ってきて皆の視線を集めた時からクラスの子を惹きつけるものが彼にはあった。一部の男子たちから妬み嫉みを込めた目を向けられていたのも仕方ない。

「一之瀬、わるいが白川に学校の案内をしてくれないか」

担任の先生が朝の早い段階で私にお願いしてきた。

自分で言うのも何だけど、私はクラスのまとめ役にもなっていたせいか先生たちに信頼されているという自負があった。周りのクラスメイト達も口を挟んで自薦してくる

こともなく聞き流していた。断る理由もなく、私は喜んで承諾した。
「私、一之瀬帆波っていうの。よろしくね、白川くん！」

因みに白川くんの席は私の隣だったから、私の彼への自己紹介はクラスの中でも早い順番で終っていた。

学校のどこにどの教室があるのかとか、どんな部活があるのか、あの先生は優しいとか厳しいとか、白川くんが疲れ果てそうなほどの質問の嵐にも丁寧に答えていたように、この学校で過ごすうえで役立ちそうな事を私も一つ一つ教えてあげる。……つもりだったんだけど、いざ案内しようとなった時にはクラスの他の女の子も一緒に付いてきていて、私の仕事は殆ど無くなってしまった。にやはは、皆が転校生と仲良くしようとするのは良いことだから、まあいっか。

とにかく、中学三年生という程度の人間関係が固まっている時期に来たものの、白川くんはクラスで孤立してしまうことはなかった。誰とでも一定の遠くない距離感を保っていて、誰もが気軽に話しかけられるような立ち位置。

クラスを中心に立つことはなかったけど、皆が一目置いていた。
なぜなら……

一位 白川 悠里 500点

白川くんが来てから1か月経たないうちにあつた大きなペーパーテスト。

そこで彼は颯爽と学年一位を掴み取つたのだ。しかも全教科満点。なんということでしょう。

廊下に張り出された大きな模造紙の一番上に、2年生まで全く見たことのない名前が表立つて刻まれたことで、瞬く間に彼の名前は知れ渡つてしまつたのだ。

「凄いね白川くん、全教科満点だなんてっ！」

クラスの女子生徒が嬉々として彼を褒めたたえた。その場にいたのは一人じゃなく、3, 4人が彼を取り囲んでいた。私は隣の席だつたため、彼を取り巻く子達のこととは自然と目に入つてきた。

「え、何で知つてるの?」

テストの上位が公の場に張り出されることを彼は知らなかつたらしい。張り出された瞬間に何人もの生徒がそれを群を成して確認しに行くのが定番というか自然の流れになつてはいるんだけど、彼は教室から大勢出ていくのを不思議そうに見ていた気がする。

「そうなんだ。あはは、何か恥ずかしいな……」

照れくさそうにそう呟いた。持ち上げられるのはあまり好きじゃないのかもしれない

い。

ただ、このテストを節目に、皆が白川くんを見る目がちよつと変わった。面白い経歴を持った見た目のいい男子だけではなくなった。勉強を教えてもらうという口実に、彼に近づこうとする女の子も何人か出てきた。

私の中でも彼を見る目が変わった。変わってしまった。

恋愛的好意を抱くようになった訳ではない。

むしろ逆。

——私は彼を警戒するようになった。

彼が私より優秀であるという事実を、私は誠意をもって受け入れることができなかつた。

私の家は母子家庭で、お母さんと2つ下の妹との3人暮らし。裕福とは遠い生活を送っていた。二人の子供を育てながら働くお母さんはいつも大変そうだった。だから私は沢山のお金がかかる高校に進学せずに、中学を卒業したら働こうと思っていた。

そんな中、先生が私に提案してきた。中学校で優秀な成績を修めることができたなら、特待生制度を利用できるようになることを。お母さんの負担を減らして進学できるという道。

だから私は今、必死に勉強をして、学校では一番を目指している。実際に一番を取つ

たこともある。

でも、その道が塞がれてしまうのではないかという危機を感じた。圧倒的に私よりも優秀な白川くんという存在によって。

彼はそんな私の気も知れず、毎日私の隣の席で授業を受けていた。勿論彼に非はなく、私の一方通行な意識でしかないんだけどね。

チラリと横目で白川くんに視線を向ける。彼はどのように授業を受けてあの点数を叩き出したのか知りたかった。盗めることは盗んでしまおう。

とても綺麗な背筋で座る彼。机上には開かれた教科書とノート。左手でノートを抑え、右手でシャーペンペンシルを持ち、首を少し下に傾けて両目を閉じて眠っている。

……………寝てるし。

音も立てず姿勢を崩さずにぐっすりと寝ている。よく見ると彼の手元の教科書は、今やっている内容の4ページくらい前のところで開かれている。30分くらいはこのままだったのだろう。

ちよつと腹が立ってきた。こんな授業態度でテストで満点をとってしまうなんて。顔が正面ではなく絶妙な角度で俯き気味だから前に立つ先生にはバレていないのかもしれない。教科書を見ているようにしか見ええないのかな。

「よし。じゃあこの問題を白川、解いてくれ」

そんなことも知らずに、先生は構わず彼を指名した。

名前を呼ばれたからなのか、ゆっくりと目を開け、顔を上げて黒板を見る。同時か直後ぐらいにクラスメイトの視線が集まったからなのか、彼が眠っていたことは気づかれていなかった。

「3番です」

「正解だ。流石だな」

小さく笑みを浮かべて先生は彼を称賛した。周りの生徒たちの何人かも唸っている。……え、居眠りしていたのになんで解けちゃってるの？

「(白川くん、今さっき居眠りしてたよね……?)」

彼にしか聞こえない声量で尋ねる。

「(あ……、ばれてた?)」

彼はちよつぴり気まずそうな顔をしていた。

「(ううん、多分私しか気づいていないと思う)」

「(そっかあ、内緒にしておいてね)」

いやそうじゃなくって、

「(なんで眠っていたのに答え分かったの?)」

「(え?)」

なぜかその質問が来ることが予想外だったみたいな顔をされた。

「(……まあ、英語はね?)」

英語圏での生活が長かったから、英語の問題はお茶の子さいさいなのだろうか。……

うん、やっぱりちよつと腹が立つかも。

その後もちよつと時間が経つたらまた白川くんの両目は閉じてしまっていた。

他の教科でも、白川くんは同じように居眠りしていることが多々見受けられた。それでも突然先生に当てられても滞りなく答えられていたから不思議だ。本当に眠っているのかも疑わしいほどに。

なんて羨ましいんだろう。

彼の頭脳に対して、私は正直にそう思った。



須藤が暴力事件を起こした。

7月になってクラスポイントの上昇、及びプライベートポイントの配布を待ちわびて

いたオレ達Dクラスの期待を裏切った原因がこれだ。

クラスポイントとしては87ポイントと小さいながらも確かな一歩で前に進めてはいたものの、一年全クラスへのプライベートポイントの配布が延期されてしまっている。

告発してきたのはCクラス。

無抵抗のCクラスの生徒三人が須藤一人にボコボコにされたらしい。須藤、そしてDクラスの処分が決まらなければオレ達のお小遣いは手元に來ることもなく、結論付けられる内容によってはクラスポイントがまたゼロになってしまいかもしれない。

クラス全体からのブーイングの嵐が須藤を包み込むのは必至であったが、本人からの主張は意外なものだった。

「正当防衛だっつーの！ Cクラスの奴らに呼び出されて痛い目にあいたくねえなら部活のレギュラー入りを降りろって脅されて！ やられる前にやってやったっつう訳だっつー!!」

仕組まれた事件。

その可能性が容疑者である須藤の主張から示唆された。

同じDクラスとしては黙っておけない。クラスを中心として位置づいている平田と榎田が事件の目撃者捜しを提案した。平田に釣られてクラスの女子生徒達が、榎田に釣

られて男子生徒達が協力に応じる形となった。

かくいうオレこと綾小路清隆も榎田に上目遣いでお願強要いされ、こうして目撃者を共に探すことになってしまったのだ。榎田に惚れたわけではない。榎田に惚れた男子達の『協力しなければ容赦しない』という睨みが辛かったのだ。須藤もCクラスの自称被害者達にこんな感じの目を向けられたのだろうか。なら殴っても仕方ないな。

「たとえ脅されても暴力で対抗するなんて愚かだわ。後々自分が困ることになるなんて明らかなのにな」

そうだと須藤、堀北の言うとおりで。何事も暴力に訴えていては平穩は訪れない。人は論ずることで物事を解決できるんだからな。

堀北の苦言が隣の席にいるオレにしか聞こえない音量でなければ須藤の機嫌は更に悪くなっていただろう。

事件解決のキーパーソンとなる目撃者が見つからない中、強力な助っ人がオレ達に加わった。

Bクラスのリーダー役を務める女子生徒、一之瀬帆波だ。

榎田と仲の良い彼女は目撃者探しを手伝ってくれることになった。同じくBクラス

の神崎の提案で掲示板に情報提供を呼び掛ける張り紙を貼ることによってCクラスの生徒の情報が匿名の人物から手に入った。

被害者の一人である石崎という生徒は中学の時は有名な不良であったということ。須藤がどれほどの強者なのかはオレの知るところではないが、喧嘩慣れしている同い年が三人がかりで一方向的に痛めつけられることは考えにくい。わざと痛めつけられたという可能性、Cクラスの陰謀説が現実味を帯びて来た。この調子でいけば、逆にCクラスに一泡吹かせることが出来るかもしれない。

「今のところまだ決め手に欠けるね……。事件そのものの情報があればいいんだけど」
榎田の言う通りオレ達が行き届いたのは個人のプロフィールに過ぎない。

たとえ過去に大事件を引き起こしたとしても、それを今回の事件の弁明に用いるのは得策とは言えず、相手が軌道に乗るきっかけを与えるだけだ。

あくまで求めるのは事件の目撃証言。そう都合よく出てくるとは思えないが。
「実はね、Aクラスの人にも協力してもらおうと思っていたの」

一之瀬が意気揚々と打ち明けた。

既に落ち合う連絡をしていたらしく、端末を見て時間を確認している。

「Aクラス？」

いち早く反応したのは堀北だ。

「信用できるのかしら。Aクラスの生徒からしたら手伝うメリットなんてないと思うのだけれど」

その理論は目の前にいるBクラスの生徒にも言えるのではないのだろうか。

「大丈夫、信頼できる人だから」

曇りのない瞳で言われたら堀北も楯突く気にはならなかったらしい。

一之瀬が言うにはカフェで待ち合わせをしているらしいため、今からそこへ向かうとのこと。

オレを含め、この場にいた全員が一之瀬に付いていく。メンバーは、Bクラスからは一之瀬と神崎の二人、Dクラスからはオレ、堀北、櫛田の三人だ。

「こんなに大勢で会いに行つて迷惑じゃないのか？」

進む先に誰がいるのかは知らないが、これからオレ達はその人物にAクラスでも暴力事件の情報収集をしてもらうために交渉をしに行く。如何に一之瀬と親しい仲であろうとも、他4人はそうではないだろう。不用意に威圧するような人数で協力をあおぐのは良案とは思えない。

「彼はそんなこと気にしないと思うし、絶対に協力してくれるからっ！」

心配のしの字も見当たらない。よほど信頼しているのだろう。一体どんなヤツなのだろうか、今のところ性別しかわからない。

◆ 「あ、いたいた！」

待ち合わせ場所であるカフェで優雅にコーヒーを嗜みながら本を読んでいる人物に
一之瀬は声をかける。

オレも知る人物、白川だ。

「ごめん白川くん。ちよつと待っていたでしょ」
「そんなことないよ」

白川は本を閉じて仕舞いながら否定する。

「嘘、コーヒー半分も飲んでるじゃん」

「……、じゃあちよつと待ってた」

じゃあつてなんだ、じゃあつて。

無駄に観察された白川は今度は些かジト目気味で肯定する。二人の口調からは知り
合つて数日数週間の仲ではないことが推察される。

「一之瀬さんの知り合いつて白川くんだったんだ」

今度は櫛田が朗らかな笑顔で話しかける。

「白川くん、この前はありがとうねっ。私びっくりしちやっただ」

「榎田さん。……ああ、あれね。あれは間違えたんだよ、うん」

「またまたあ、白川くん優しいんだもん。絶対ワザとに決まってるよ」

榎田桔梗、恐ろしいやつだ。

白川とも交友関係を築いているとは。入学当初に『学園中のみんなと友達になりた』と目標を掲げていたがどうやら侮れないらしい。一体この二人の間で何が起こっていたのだろうか。おそらく白川がそれはもう美しい所業を為したのだろう。

「……彼は一体何者なのかしら？ 榎田さんとも仲が良さそうだけど」

蚊帳の外を自覚した堀北が尋ねてきた。

「Aクラスの白川だ」

オレよりも早く答えたのは神崎だ。

お前も知っているのか。

「……あなたも知っているの？」

「いや、直接会ったのはこれが初めてだ。だが割と有名なヤツで、Aクラスの中でもトップクラスに優秀だと断言できる。Aクラスを目指すなら無視できない人物だ」

その眼差しからは白川に対する警戒心が見て取れる。

神崎の言葉で堀北の白川を見る目も変わる。Aクラスに上り詰めることを人一倍強

く志している堀北からすれば、この場合は白川を味方に引き込むだけのものではなくなっただろう。

待ち合わせをしていたからか、白川は大人数で腰を下ろせるテーブルを確保していたため、オレ達はそこに加わる。

事の詳細を白川に教えるところから始めるため、ある程度時間を要することになる。そのため人数が増えたことに気づいて近づいて来た店員にオレ達も飲み物を注文した。

「白川くんを呼んだ理由なんだけどね、」

一之瀬は早速本題へと入る。

「プライベートポイントが支給されていないことについてでしょ？」

白川には予想がついていたらしい。

Aクラスにもある程度噂が届いているのだろう。

「うん、DクラスとCクラスが大変なことになっていてね——」

一之瀬は現状オレ達を知る事件の詳細を全て白川にも共有した。

日時、場所、当事者の名前と人数、須藤の証言を元にした事件の流れ、予想されるCクラスの企み。

白川は情報の一つ一つを噛み締めるように聞く。他クラス間での厄介ごとではある

のに無下には扱わない。力になれるならと歓迎の姿勢だ。

「掲示板の張り紙も一之瀬の仕業？」

「それはね、神崎君が考えてくれたの」

「ふーん」

チラリと神崎を見る白川。

他クラスの事情にそこまで手を貸すのかと感心しているような表情だ。

「それでね、白川くんにはAクラスの中に目撃者がいないか探してほしいの」

「……、その様子だと苦労してそうだね」

オレ達Dクラスの3人に対する同情の念を込めて、ふう、と白川は小さく息を吐いた。いたたまれない気持ちに包まれる。オレ達は藁にも縋る想いで他クラス全てから力を借りようと思っている。白川のことだからクラス中から情報を集めることに苦はないだろう。

「まあ、クラスに聞いて回ることは構わないけど」

「本当？　ありがとう！」

一之瀬は満面の笑みで感謝した。櫛田も喜びが顔に浮かんでいる。神崎や堀北も不安が軽減したようだ。

しかし、

「一応聞いておくけど、」

悪気など微塵にも感じられない面持ちで白川は言う。

「本当にCクラス側の策略でこうなったの？」

その疑問は尤もだ。

須藤と同じDクラスの中にも同じ考えのヤツはいる。Cクラスに嵌められたことを証明することがオレ達の今の目的。だからこそ今は須藤の潔白を論理的に示すことは出来ない。協力を呼び掛けた櫛田や平田の行動原理が同じクラスのよしみという立ち位置からであることは明らかだ。部外者からすればDクラスは都合のいいように周りに訴えかけているようにしか見えないのかもしれない。

「うん、間違いないよ」

白川の的確な指摘に、一之瀬は口籠ることなく肯定した。

当事者たるオレ達Dクラスの3人が回答に戸惑う中、Bクラスの一之瀬が須藤の無実を断言しているのは不自然かもしれない。

しかし白川は微笑んで受け入れた。

「……ん、今日中にある程度呼び掛けておくよ」

「ありがとつ、白川くん！」

一之瀬に対する信頼が伺える。

だが、信頼からくる感情論というよりも、一之瀬が迷わず断言するという現象がどうということなのかを理性論で判断しているようにも見えた。

「あ、そうだと白川くん」

榊田が思い出したように提案する。

「一応、連絡先を交換しておいても良いかな？ 今後何か分かった時に毎回一之瀬さんを経由したら不便だし、一之瀬さんにも申し訳ないから……」

「勿論いいよ、それぐらいのこと」

おそるおそる低姿勢で尋ねた榊田の表情が、白川の即答で朝日を浴びた花のように煌めいた。池や山内がその顔を向けられたら鼻の下が顔面の五割を埋めるほど伸びるだろう。いや、あいつ等にはこれ程の表情を見せない気がする。

白川はポケットから端末を取り出し、慣れた手つきで操作してテーブルの中央に置いた。画面には白川の電話番号とメールアドレスが表示されている。端末が置かれたのは榊田の目の前ではなく、テーブルのど真ん中。榊田に限らず登録したい奴は自由に登録してくれという配慮が見て取れる。

「俺もいいか？」

察したのか神崎も注文する。

「どうどうどうどう」

「端末はある意味自室よりもプライベートな性質を含有している。ふとした一瞥や指一本で個人情報を知られてしまうため、操作中は常に画面を隠したり、触れられることを毛嫌いする人間も少なくない。

やってはいないが、榎田や神崎が端末を手元に引き寄せてバレない程度に操作されることは考慮していないのだろうか。

などと要らぬ考えを脳内で巡らしている間に、隣に座る堀北も自分の端末を操作して白川の連絡先を登録している。おい、白川はイヤツだから気にしないかもしれないが、礼儀として許可はとれよ。あと自分の連絡先を白川にも教えておけよ。

「あなたは登録しなくてもいいのかしら？」

オレの視線を感じ取ったのか、堀北はこちらを向き、オレが端末を操作していないのに気付く。

「……オレは既に白川の連絡先を登録している」

お前たちとは違うんだ。すでに白川とは友人関係にあるんだ。連絡先程度とうの昔（一か月ぐらい前）に交換を済ませているんだ。

「……………綾小路君、個人情報を盗むのはれっきとした犯罪よ？ 退学になりたいのか

しら」

解せない。酷い。

堀北も自分の連絡先をしつかりと教え、登録し終えた白川は端末を元々入れていたポケットにしまった。

「一応そつちでも分かったことあつたら教えてよ、気になるから」

「うん、勿論そうするよ」

立ち上がりながら白川はお願いし、一之瀬が了承する。協力関係となつた以上、断る理由もない。柔らかく微笑んだ白川は一足先にこの場から立ち去る。オレ達は見えなくなるまで目で追おうとしていると、白川はカフェの入り口にあるレジで立ち止まった。

「あ……、え!?!」

何かに気付いた一之瀬は慌ててテーブルの上を見渡し、あるものを探す。身を乗り出しそうな勢いだ。一之瀬に限らず他のメンバーも察したが、伝票は見つからない。

「……にやはは、やられちゃった」

席はレジから遠く離れており、止めようにも間に合いそうにもない。自分が飲んだコーヒーに限らず、白川はこの場にいる全員が注文したものの全ての代金を何も言わずに支払ってしまったのだ。今更追いかけても、白川の性格上ポイントを受け取ることはないだろう。なんてイイヤツなんだろうか。

「まったく、白川くんは……」

どこか悔しそうに一之瀬は白川の背を見送った。あはは、と櫛田も同調するような諦念を顔に浮かべた。

「……一之瀬さんは彼とどういう関係にあるのかしら？」

オレも気になっていたことを堀北が聞く。

もしかして恋人なのだろうか。美男美女でお似合いだとは思うが。

「中学三年生の時に白川くんが私の学校に転校してきてね、同じクラスだったんだ」

聞いてほしかったのだろうか、その説明には嬉しさが垣間見れた。ほんの僅かに朱に染まった頬が物語るのはただのクラスメイトという関係だけとは到底思えない。

しかし一之瀬は白川と知り合って一年経つということが分かった。白川の友人ダービーでは一之瀬が一步リードしていることは認めよう。

次点はオレ、その次に櫛田なのは譲れない。

龍園翔の関心

『なるほど、CクラスがDクラスに虚偽の罪を着させようとしているのですね』

一之瀬含めたB、Dクラスからの協力の要請を快諾した白川は、カフェから離れ去って早速坂柳に連絡を取っていた。

Aクラスで情報を集めるならリーダーの地位に立つ彼女に声をかけるのが何より手っ取り早いからだ。

協力してもらうために、白川は先程得た情報を惜しみなく提供する。

『できる範囲でいいけど、情報を集めてもらってもいいか？』

『フフ、そうですね。白川君が私の派閥に入ってくれるなら欲しい情報を全て集めて差し上げますよ』

玩具を貰った子供のような嬉々とした態度で坂柳は提案する。退屈な日々が続いている中で突如現れた他クラスのひと悶着が彼女には興味深いことのかもめない。

冗談半分未満、本気半分以上の提案が白川に届いた。

「葛城にも頼むから」

『……そうですか、手の届く範囲で調べてみますね』

一時的に難聴にでもなったかのように、感情の起伏のないままの白川に対して、坂柳は今回も勧誘を諦めて電話越しに肩を落とした。

葛城なら無作法な条件もなしに力を貸すことは容易に想像できる。

「さんきゅー」

『ところで白川君』

「ん？」

事件など些末であると言わんばかりに坂柳は真剣な声色で話題を変換する。

『Bクラスのリーダーである一之瀬さんと、なぜそんなにも親しいのでしょうか?』

「中三の時のクラスメイトなんだ」

『……そのような大事なこと、初めて聞きましたよ?』

「初めて言ったからね」

事もなげに白川は説明するが、坂柳からは不思議と不満が伝わってくる。

「……どした?」

『……いえ、何でもありませんよ? 白川君の交友関係が思いの外広がって感心しているん

ですよ?』

「……そう、それは良かった」

多くは尋ねない。尋ねるべきではないと白川の優秀な頭脳が結論付けた。



白川が坂柳と通話をしながら向かい、通話を終えたところにたどり着いた場所は図書館だった。

彼は週に一回ほどここに訪れては気儘に書物のダンジョンを探索し、当たりか外れかわからぬ宝物を借りては堪能している。

今日は探しているものが二種類あった。

一つは例のごとく一冊の小説。それは早々に見つけ他人に取られぬよう手に取った。そして落とさぬよう本を大切に小脇に抱えながら、読書用もしくは勉強用にテーブルとイスが整然と並べられたスペースに移動し、見渡す。今日は図書館の利用者が比較的少なかったため、お目当ての人物を見つけるのに時間はかからなかった。

「椎名さん」

サラサラとした長髪、穏やかな目元が特徴の美少女と言って差し支えない1—Cに在

籍している生徒、椎名ひよりに白川は声をかけた。

「白川くん、こんにちは」

「こんにちは」

軽くだが丁寧な挨拶を済ませて白川は彼女の向かいの席に腰を下ろし、所持している小説を開いて読み始める。

彼が今日はそのような本を選んだのか興味を持った椎名は向かいの席で読まれている本の表紙を確認し、あることに気付いた。

「あつ、その本は……」

「ん、椎名さんが勧めてくれた本。返却されてたから読んでみるよ」

「ふふ、是非感想を聞きたいです」

「い、い、よー」

自分のお気に入りの一冊を選んでくれたことに対する喜びを、椎名は柔らかいほほ笑みで示した。

二人が親しい関係になった経緯は外でもない、読書だ。初めて出会った場所は今二人がいる図書館。読書が趣味の生徒が同じクラスにいなかった椎名は、自分の好みに当てはまる本に手を伸ばす一人の少年、白川を見つけては声をかけ、人格としても親しみやすかった彼とは直ぐに意気投合し、そして度々本を勧める仲にまでなった。

「本を読んでいるままでいいんだけど、椎名さんに聞きたいことがあるんだ」

ある程度読み進めたところで視線で文字をなぞるのは止めないまま、白川は本題を持ち出す。

「何でしょう？ 私が力になれることならいいんですけど」

同じく彼女も読書を続けながら聞き返す。白川が要望を持ってくるのは今までになかったことだ。

「CクラスとDクラスの間で起こった暴力事件についてなんだけど」

椎名のページを捲る手が一瞬止まる。ある程度予想がついていた内容だが、気が進まない事柄でもあった。

「……私はあまりクラスの輪に加わることがありませんので。事件が起こっていることは知っていますが残念なことに詳しくはありません」

「そっか、なら仕方ないよ」

白川からは深く掘り下げる意思は感じられない。得るものがないことに対する落胆もない。日常会話の延長、明日の天気でも尋ねるかのような扱いだった。

そんな彼に、一連の事件の肝と呼べる情報を椎名は提示する。

「ですが今回のことは龍園君が大きくかかわっていることは予想できます」

「龍園？ 誰それ？」

「俺だよ」

温和である、聞き心地が良いとも評価できる白川や椎名の声色とは正反対な、荒々しく骨太な声の持ち主が登場した。白川の背後、椎名の正面。男としては長髪で、鋭い目つきと怪しげな笑みを浮かべる口元。白川とは違い黒のカッターシャツを身にまとった椎名と同じJ—Cの男、龍園翔がそこにいた。

「——俺が龍園だ」

その場に登場したのは彼だけではない。龍園の後ろには、恵まれた体格を持つ黒人の男子生徒、短髪でクールな印象を受ける女子生徒、そして顔面の所々に絆創膏やガーゼによる医学的な措置が施された男性生徒を召し連れている。

白川は本に葉を挟んで閉じ、振り向いた。龍園と名乗る生徒、その後ろの三人の生徒の顔を見て、口を開く。

「……………初めまして龍園君。俺の名前は——」

「Aクラスの白川だろ？ 坂柳派にも葛城派にも加わっていないAクラス唯一の一匹狼」

名を先に言われたことに対して白川は動揺した様子はない。しかし威嚇ともとれる鋭い目つきに白川はどこか居心地の悪さを覚えた。

「ふふ、白川くんは有名人なのですな」

「……他クラスにまで目立つようなこともした覚えはないし、ぼっちのつもりもないんだけどね」

変わらず呑気な椎名、不満げな白川。そんな二人を龍園の背後にいる三人は違和感を持ちながら見ていた。自分のクラスの中でも誰かと親しく過ごすことが少ない椎名と仲良く読書をし、常に高姿勢で攻撃性を隠そうともしない龍園に背後に立たれても警戒心が微塵にも沸いている様子もない白川という得体のしれない人物。

そして椎名を呼びに来た龍園が、彼に明らかに興味を示していた。

「ひより、そろそろミーティングの時間だ。また参加しねえつもりか？」

「私はあるような場があまり得意ではありませんし、参加したとしても私に言えることはありません」

龍園は視線を白川から外し、当初の目的であった椎名の連行を試みるが、見込みは薄いようだ。

「ンなもん参加しねえと分かんねえだろうが。他の馬鹿共と違って頭はキレるんだからよ」

「無理して誘うもんじゃありませんよ。得意不得意があるんなら好き嫌いもあるんだから」

「部外者が口を挟んでんじゃねえ」

「それもそうだ。俺には縁のない話だった」

一言添えてみたら想像以上に凶暴に突っぱねられ、諦めを感じた白川は読書でも再開しようと思っ指をかける。

「……いや、」

眉間に込めた皺をほどこいて、龍園はあることを思いついた。

いたずらっ子とは違う、悪巧みが芽生えた男の笑みが白川に向けられる。

「そうだ、ひよりを庇うってんならテメエが代わりに参加しろ」

「……はい？」



何故か椎名の代わりに白川が連れていかれたのは、高級感漂うソファが壁をなぞる様に設置され、天井に吊るされたミラーボールが空間を派手に彩る団体客には御用達のパーテイルーム、ではなく、灰色のコンクリート構造物に囲まれた路地裏だった。

夏に片足突っ込んだこの季節、鋭い直射日光を浴びなくても多湿という日本の特徴的

な気候はある程度の居心地の悪さを皆に等しく与えている。

勿論このような場でＣクラスが会合を催しているわけもなく、白川が龍園達に連れてこられるまで人影もあるはずもなかった。それどころか、見渡しても耳を澄ましても人の気配を感じることはない。一般的に用途などないこの場には意図的に足を運ばねばたどり着くことは無いだろう。

先頭を歩んでいた龍園が立ち止まり、振り返る。それを合図に白川も足を止める。龍園が引き連れていた生徒で、山田アルベルト、伊吹濤、石崎大地の三人は白川の少し後ろで彼の逃げ場を塞ぐように横並びになる。

龍園の鋭い視線と白川の穏やかな視線が重なる。数秒の沈黙。形から見れば白川が袋の鼠なのは間違いないが、

「……で、何のよう?」

白川には緊張感の欠片もない。まるで見知った友人たちに囲まれているかのように。「ククク、話が早くて助かる」

似つかわしくない態度の白川が面白いのか、己の優位性を疑わない龍園の口元が吊り上がる。そして探る様に白川の足元から頭まで観察する。

「黙ってノコノコついて来たのは考えがあつてなのか、それとも単なる馬鹿なのか……」

「……………」

「まあいい。まずは……伊吹、コイツにボディチェックしろ」

「は？ 何で私がそんなこと……」

不意に思わぬ命令が飛んできたことに、伊吹は顔を顰める。

「つべこべ言つてねえでサツサとやれ」

「連れて行つた上にそれはちよつとひどいんじゃないの」

お預けを食らつた白川は眉をハの字にしたため息を吐いた。

「ウルセエ、黙つてそこで立つてろ。テメエのことだ、盗聴器なんか仕込んでいるかもしれねえ」

「そんなカツコいいモン持つてないよ」

文句を言いつつも、白川は両腕を軽く浮かせ、無抵抗の意思を示す。

伊吹は澁々ながら白川のボディチェックを始めた。龍園が言った盗聴器などが隠せそうな場所を両の手でパタパタとはたく様に調べる。粗雑に済ませてやり直すように再度命令されるのも不愉快だからなのか、やれるだけのことはやるつもりらしい。終えた後、龍園に顔を向けて結果を報告する。

「……携帯しか持つてないわよ」

「そう簡単に結論付けんなよ。パンツの中に凶器仕込んでるかもしれねえだろ」

「やめてよえつち」

路地裏で全裸になることは白川も避けたい。

下品な発言に、伊吹もゴミを見るような目を龍園に向けた。

「クク、冗談だ。……伊吹、携帯を奪って寄越せ」

伊吹はチラリと白川を見ると目が合った。ご自由にどうぞとでも言いたげな表情を確認した伊吹は白川のポケットに手をつ突っ込んで携帯を取り出す。二つ折りのカバールを開くことなくそれを龍園に手渡した。

受け取った龍園は携帯を起動し、チェックする。学校から生徒たちに例外なく配られたこの端末でも盗聴の役割は十分に果たせるのだ。

「……チツ、何もなしか。ひよりに暴力事件のこと聞こうとしてた割には何も準備してなかったってか？」

審議に役立てるには伝聞するだけではなく、データとしての記録が望ましいのは明らかだ。

「何いってんだか。俺は今話題のことを聞いていただけだつてのに」

携帯端末には問題なしと判断した龍園は乱暴に放り投げて白川に返す。難なく受け取った白川は元あったポケットに仕舞い直す。

「ククク、まるでボディチェックを受けることも予想していたような態度だな」

「そんなわけないでしょ。……帰っていいか？」

「まあ待て。オマエには聞かなきゃいけないことがある」

ここからが本題と言わんばかりに龍園はポケットに両手を突っ込んだままで白川に一步、二歩と歩み寄る。

「Dクラスは今どんな状況だ？」

「……どんな状況、とは？」

龍園が両足を揃え止まるときには二人の距離は2メートルにも満たない。相手の不意の中に拳でも蹴りでも届けるのに苦はないだろう。

「Dクラスが自分たちの無罪を主張するためにあちこち聞いて回ってるのは知ってる。中心人物は誰だ？ 今はどこまで調べがついている？ そのうち開かれる審議ではアイツ等はどう出てくる？」

「……俺はあくまで情報収集を頼まれただけだから、詳しいことは聞いてないよ」

「内情伝えずにただ協力を要請するだけのヤツがいるかよ。知ってること全部吐け」

「例え何か知っていても言えるわけないでしょ。Dクラスの皆に怒られちゃうじゃん」

目の前には今にも手を出してきそうな男が一人。背後にはその男の指示一つでいつでも動く三人。四面楚歌もいところではあるのだが、白川は涼しい顔をしたまま、非常事態に備えた構えの影もないままだ。

「……龍園さん、コイツ完全に舐めてますよ。俺たちが絶対に手を出さないと決めてや

がる」

背後にいる石崎が、白川の態度に苛立ちを覚えて口を出す。

事実、新たに暴力事件が起こり、そこにもCクラスの生徒が関わっていたら印象は悪化するだけ、誰より困るのは龍園達Cクラス側だ。

「ここにはカメラも目撃者もない。懲らしめてやっても問題ないですよー」

脅しじゃないと証明するかのよう、石崎の右手が背後から白川の肩へと延びる。お世辞にも白川の見た目は喧嘩慣れしているようには見えない。

一発か二発、服の下など目立たぬところにダメージを与えれば話は変わるだろう。

そう目星をつけた矢先、石崎の手は白川の服を掴む前に止められた。

「……………あ？」

白川は一步石崎に迫り、触れられたことに一瞬気づくのが遅れるような、添えるように柔らかい手つきで腕相撲でもするかのように手の平を十字に重ねた。一拍置き、石崎の両目が手に向いた瞬間、離されないように白川は手を強く握り、そして捻った。

「あ……………ちよ、待……………」

想定外の握力、人体の構造上動かぬ方向への関節のねじれが重なり、大して踏み込んでいない下半身からバランスが崩れ、膝が地に着く。

石崎が手首や肘の痛みから逃れるように力を入れ返し体を持ち上げるが、それが仇と

なってしまうてどういう訳か込めた力が胴に伝わり、白川に右手を握られたまま全身が半回転して背が地面についてしまった。加えてシャツの裾を踏まれたせいで石崎は上体を持ち上げられなくなってしまった。

「ククク、ただのインテリって訳じゃあ無さそうだな」

「焦りが見えすぎだよ、石崎君。やり方が強引だし、何かやましいことがあるんじゃないの?」

「そう言うなよ白川。こっちはDクラスが何か卑怯な手を使って無実をでっちあげんじゃねえかとヒヤヒヤしてんだからよ」

どの口が言うか。三人から少し離れたところで待機したままの伊吹が心の中で吐き捨てた。

「暴力事件、ねえ……」

ため息のように呟いた白川は足元に転がる石崎の顔を改めて見る。

まだしばらくは外せそうにない外傷の措置や、目を背きたくなるような皮下出血が存在を主張していた。

「石崎君、顔すごい痛々しいことになってるけど、誰にやられたの?」

「お、お前も知ってるだろ、Dクラスの須藤に殴られたんだよ!」

不安定な態勢のまま、石崎は白川の問いに絞り出したような声で答える。

「ふうん」

痛みに抗おうとする石崎を片手だけで完璧に押さえつけながら、白川は微笑む。

「……………正直だね」

「は？ 何を言ってる——」

「君じゃないよ、…………伊吹さん、だっけ。俺が石崎君に誰にやられたのか聞いたら、一瞬だけど隣にいる黒人の彼の方向いてたよ」

顔を上げた先にいる伊吹の僅かな機微を白川は指摘する。

突然意識を向けられた伊吹は声を上げずに何とかして平静を保とうとするが、もう遅い。

「君が後から上乗せしたんでしょ？ そうでなきゃ不自然だよ、その傷は」

「……………あ……………つ、……………」

アルベルトは白川の言葉に反応を示さない。もしかしたら日本語が通じ切っていないからかもしれないが、彼以外の反応で白川は確信した。

石崎も心を落ち着かせるよう努力するが、逆に膨れ上がる鼓動音を自覚してしまい、頬に不快な汗が伝う。

「顔は見るに堪えないほど痣だらけなのに体は異常が見られない。顔殴るのって背や腹に比べたら難しいし、君らがいくらワザと無抵抗に殴られたとしても顔だけ重症なんて

ありえないでしょ。……問題は、何のためにそうしたのか」

白川の一言ずつに喉が締められるような錯覚を覚える。

「審議で優位に立つため？ 傷が派手だと第三者は同情してくれるかもしれないから。

……もしくはは」

拘束から逃げ出すのを忘れるほど、精神的に追い込まれる。

「何かミスしたんでしょ。そのお仕置きで君は追加でポコポコにされた」

強引な反論すら思いつかない。示す前に無駄と察してしまふ。

「そうだな……、例えば、須藤君に殴らせていた時に目撃者の存在に気づい——」

「——アルベルト」

龍園の一言。それだけで今まで一音も発することなく一步も動かなかつた、この場で最も体格に恵まれた男、山田アルベルトから躊躇のない拳が白川に叩き込まれる。

肉と肉がぶつかる音。ただしそれは白川を殴り飛ばした音ではない。

白川は石崎を抑えている手を離し、投げられた球を丁寧に捕らえるように胸の前で両の手を重ね、日本人では得られない、豪気なカラダから放たれるその一撃を受け止めた。

「……危ないじゃん」

「ククク、意外とお喋りじゃねーか白川よ。しかも脈を測りながら石崎に尋問しやがっ

て。強かもいいとこだ」

ただの敵の情報源、ただの警戒対象。その程度の扱いじゃ収まりきらない相手だと龍園は確信する。

「——気に入った。どうだ白川、オレと組まねえか？ Aクラスの温室よかスリルある高校生活が送れるぜ？」

「……冗談でしょ？」

白川の口から呆れが零れた。

「テメエは坂柳派にも葛城派にも属してねえと聞く。……物足りねえんだろ？」

龍園の笑みに新たな味が加わる。優位性の誇示や脅しとは異なり、そこには快や悦を孕んでいた。

「オレには分かるぜ、テメエはオレと同類だ。つまんねえんだろ？ 楽しみてえんだろ？ だから坂柳や葛城には一目置かれるようにある程度の力を見せつつも自由度の高い中立派に居座っている。ここに黙ってついて来たのもただの暇つぶしなんだろ？

だがテメエはこんな腹の探り合いじゃあ満たされねえ」

「……、」

「俺と遊ばねえか？ テメエが求めているモノを与えてやるよ」

「……龍園君、」

白川の笑みも色が変わる。

彼は龍園に感心していた。Aクラスには居ない、彼のような人物だからこそその指摘に。

「いい線いってる」

ズレた内容ではない。むしろ正解といっても良い。

しかし、それは完全に的を射ているわけではなかった。

「でも俺はね、今は今で結構満足しているんだよ」



私の名前は神室真澄。

趣味の万引きが坂柳にバレてしまつてそれからはヤツにいいようにこき使われているAクラスの女子生徒。

自己紹介終わり。

今日は坂柳にケヤキモールに連れられていた。

身体的にハンデを抱えている坂柳の荷物持ちになることは多々ある。同じ女子生徒ということもあり男子共には手が届かないことを任せられることも割とある。正直なところ、面倒くさいというのは本音だけど仕方ないという見切りもあった。

今はカフェで一休みという状況だ。

先程までのショッピングの途中で白川からの着信に気付いたら朗らかな笑顔を浮かべて通話を始め、通話を終わるときには何故か何かに納得がいかないように表情を曇らせていた。そのアンタの他では見られない情緒不安定は一体なんなの。

どうやら白川はCクラスとDクラスの間で起こった暴力事件の目撃者を探すことを協力するように頼まれたらしく、手っ取り早くAクラス内で情報を集めるべく坂柳に声をかけたってわけね。多分葛城にも声をかけるっぽい。

坂柳は自分の派閥に属するクラスメイト全員にグループチャットを通して情報の提供を呼び掛けている。

まあ、そんなに都合よく事件の目撃者が見つかるわけでもないから、白川が一番欲しい情報は手に入らなかつたけどね。

分かったことといえば、Cクラスは度々大人数を收容できるパーティールームをレンタルして親睦会めいた事をしてるとか、他クラスに妨害行為をするようにリーダーの龍

園が命令しているとか、役に立つのか立たないのか分かんないことばかり。

まあ、Cクラスを褒められるような言葉は聞かないから、碌でもないクラスってことは十分に分かったけど。

「——まあ、これぐらいの内容で十分でしょう」

坂柳的には事足りているらしい。

携帯を操作して白川に集まった情報を送信している。

「そんなもんでいいの？ 事件の解決につながるとは思えないんだけど」

「白川くんもあくまで一之瀬さんに頼まれた内容をこなすことが目的ですから。ない情報もの捏造まですることは彼の意志に反します」

そんな綺麗ごとに従う性質タチでもなくせに。

白川を引き込もうとしている立場上、下手なことは出来ないんだろうか。私にもそういう扱いをしてほしい。

「それに、これだけでも白川君なら十分に役立てられますよ」

その絶大な信頼はどこから来ているのか。

「さて、お買い物続きに行きましょうか」

席を立った坂柳に私も付いていく。さつきまでは本屋で小説を探していた。それも白川が勧めてきたものらしい。

カフェで小休憩を挟んで私たちは通りに出た。時間帯もあって学生で賑わっている。あまり人で溢れていると坂柳には移動が辛いところではあるけど、それほどではない。しばらく歩いていていると、前方に5、6人ほどの団体が私たちとは反対方向、つまり現状こちらに向かつて歩いてるのに気付いた。

特徴的といってもいい集団だ。男女比が偏っている。先頭を歩いているのは金髪をオールバックにした、集団の中で唯一の男子生徒。同じクラスの橋本ではない。橋本よりはガタイが良く、何故か誇らしげな笑みを絶やさずに歩いている。そしてその男に複数の女子生徒が御供している。なんだそのハーレム。

先頭の男は他の通行人には気を遣う様子がなく、進路が重なりそうならお前が逸れずれ違えといった態度だ。

それを察した坂柳は何も言わずに通路の端に少し寄った。

「おや、君は——」

すれ違う直前、男が立ち止まり、こちらに体を向けてきた。

まさか声をかけられるとは思ってもみなかった。坂柳も見るからに面倒そうな集団に関わる気はなく意外だったのだろう、反射的に立ち止まって振り向いていた。

ここまで近づいて私も気が付いた。この男は私たちと同じ一年生で、他クラスの生徒だ。女子生徒たちは見覚えがないから恐らく2年もしくは3年の上級生だろう。

坂柳を体格でも態度でも見下しながら、男は言う。

「——君は確か、我が親友である悠里に付きまどっている、リトルガールじゃあないか」
「……何ですって？」

私は察した。確信した。

あ、これ面倒なやつだ、と。

高円寺六助の助言

高度育成高等学校に入学したばかりの頃、私は少なからず退屈を感じ続けていました。

国が主導して教育を行う、実力至上主義である外部とは遮断されたこの空間。学校の謳い文句に釣り合う高水準の生徒が多く在籍していると思いましたが、期待外れもいくつかあります。

「今から配るこの学生証カード。このカードは言わばクレジットカードのような役割も持っていて、学校の敷地内にある施設で色々なものを購入することができる」

三年間私たちの担任を勤めることになった真島先生から学校の仕組みが説明される。皆、聞き逃さないように静かに教卓に体を向けています。

「金銭の役割を担うポイントだが、毎月1日に自動的に振り込まれるシステムになっている。君達には最初、10万ポイントが支給されている。1ポイントで1円と同じ価値

だ

10万ポイント。高校生には贅沢と呼べる額です。贅沢を継続していかない限り、一か月で使い切ることには無いでしょう。

突如与えられたお小遣いに教室中が沸き上がる。使い道を考えることに躍起になっている方々がちらほらいらつしやいます。

——何故学校の仕組みに気付かないのでしょうか。

浮かれている周囲に対して呆れが芽生えてしまう。落胆のため息を堪えるのに苦勞します。

言わないなんて言っているようなものなのに。

この教室の中で、意図的な断言の制御に勘付いているのは何人いるのでしょうか。一か月後が楽しみです。

◇

ただ大人しく高校生活を送るつもりは毛頭ありません。

まずはこの1—Aを私の手中に収めるつもりです。さほど時間はかからないでしょうが、気長に進めましょう。

私と同じような考えを持つ方がAクラスにもう一人いらつしやいました。

葛城康平君。

強面で、スキンヘッドが特徴的な男子生徒。しかしその性質は慎重派で石橋を叩いて渡るタイプです。私とは正反対と言えます。彼も私と同様、入学してから数日で何人かのクラスメイトを束ねていらつしやいます。私と対立する日もそう遠くはないでしょう。

そして私か彼のどちらかが、このクラスをまとめ上げることになります。

しかし、彼では物足りない。

確かに彼は優秀です。学力、身体能力共に申し分ありません。でも足りない。

ただの優秀では、届きえない。それは普通の^{ノーマル}枠組みに収まっている。私を楽しませる器ではありません。

彼が失脚するのは時間の問題でしょう。

◇

Aクラス 940c p

Bクラス 650c p

Cクラス 490cp

Dクラス 0cp

黒板に書かれた4月から1か月間の結果です。

綺麗にAクラスからDクラスまで序列づけられています。……まさかDクラスが0ポイントになってしまうのは想定外ではあるのですが。

しかし、私たちAクラスはマイナスをたった60ポイントに抑え込むことができました。

私の派閥は早い段階で生活態度に気を付けるよう指示していましたが、この様子では葛城君の派閥でも同じようなことをしていたでしょう。クラスの足を引っ張ることは無さそうです。

そして、先日行った小テストの結果も張り出されました。

内容としては中学生でも容易に正答できるレベル。しかしラスト数問だけは異常な難易度になっていました。解答を書ききることさえ並みの高校生には出来ないでしょう。

結果は高得点の生徒から順に記されていました。

1位 坂柳 有栖 100点

当然、と言つてしまえば自惚れになつてしまいますが、自信はありました。皆に認識された瞬間、私に視線が集まる。

敬意や驚嘆、嫉妬。瞳に込められた感情は十人十色です。ふふふ、ここは一先ず、誇らしげな笑みでも見せておきましょうか。

しかし、そこで私は気づきました。テスト結果の順位表に書かれていた事実。

| | | | |
|----|----|----|------|
| 1位 | 坂柳 | 有栖 | 100点 |
| 1位 | 白川 | 悠里 | 100点 |

50音順に書かれていたため私の名前が一番上にありました。結果としては同率で二人が一位。真島先生が追加で教えてくださりましたが、学年でも満点はこの二人だけのこと。

このクラスは想像以上に学力のレベルが高いのかもしれない。テストのレベルも一因ではありますが、最低点も悪くない数字でした。

……………ふむ、

……………白川悠里くん……………。

……………私と同じ、満点を記録した方。

……………どのような方でしたっけ？

……………いえ、何も知らないわけではありません。

容姿も声色も、大まかにですが性格も記憶しております。というか席は私の隣です。テスト結果を公表されて皆の視線が集まっていますですが私と彼、二人が横並びになつていたので尚、集まりやすくなつていたのでしよう。

しかし、どうも思い出せません。白川悠里くん、彼について。

癖や思考回路、長所や短所。どれくらいレベルの人物か。

クラスをまとめるにあたり、Aクラスにいらつしやる方々の品定めを行いました。彼を特別視した覚えがありません。その他大勢に組み込まれる能力しかない位置付

けていました。

勉強で秀でていることは並外れた頭脳を持っていることを証明しているわけではありませんが。

しかし、あの小テストで満点を取れるほど優秀であるのなら、普段の立ち振る舞いに平凡な方との差が生じるはず。言葉の取捨選択、事象における視点、意思疎通の速度。

私はそれをこのひと月の間、見抜くことができませんでした。このことは、正直なところ遺憾に思います。

「——白川ですか？　イイヤツですよ、何回か集団で一緒に遊んだこともありますし。今のところ葛城派にも入ってはいないみたいですよ。……あとはまあ、アイツあんなに勉強できるとは思いませんでしたね」

「——白川？　まあ、見た目も良いから女子の人気が高いけど、まだ彼女は居ないって噂。ていうかアイツ、あんなに勉強できるなんてね、私も知らなかった。……何、もしかして狙ってんの？」

橋本君や真澄さんも白川くんについて今回の小テストの結果は意外だったみたいで

す。あと真澄さん、一言多いです。

とにかく、彼については違和感といえますか、不可解な点が少なからずあることは確かです。

意図的に私と距離を置いていた。自意識過剰と言われるかもしれませんが、そう仮定することでもう一段階、話が進みそうです。

そして何より、クラスポイント、小テストの結果が発表された日の放課後に、小耳にはさんだ言葉。私とクラスを二分する葛城君を誰よりも慕っている、戸塚君が嬉しそうに話していました。

「にしても白川凄いつすね！ 小テストも満点取っていますし、あいつが言った通り授業態度とか遅刻とかがクラス全員に響いていたなんて！」

どうやら彼はただ勉学に長けた頭脳の持ち主ではないようで、この学校の仕組みには気付いていたそうです。

そして何よりも注視すべき事實は、現状どちらの派閥にも属さない彼が葛城君の派閥のみにアドバイスしたこと。私は私の下に付く人のみに考察を述べ、指示をしました。彼には、まるでクラス全体を見渡しその不足分を補うかのような作意が垣間見えます。

この学校に入学して以来、人に『興味』を持ったのは彼が初めてです。

彼とじっくり話をする場を設けましょう。早いうちに。



「来ていただきありがとうございます、白川くん。どうぞそちらの席へ」

「どしたの坂柳。放課後にこんなところに呼ぶなんて」

白川くんとは教室で席が隣ですが、他の方に気付かれないよう、時間をおいてメールで呼ばせていただきました。

ここは学校の図書室。来ていただいた彼を私の向かいの席に座っていただくよう、手で指し示します。私がつた一人で待ち構えていたことに警戒することなく、嫌な顔もせずにスムーズに腰を下ろしていただけました。

「ふふふ。白川くんとは一度二人でお話したかったんですよ。それとも今日は他に用事がございましたか？」

傍から見れば、色恋沙汰にも思われるかもしれませんが。まあ、似たようなものではありますけどね。

「ん、何もないよ。暇だったからちようど良かったぐらい」

「それは何よりです」

彼は基本的に自分から誰かを誘うタイプではありませんが、声をかけられた際には予定が被らない限り必ずと言っていいほど受け入れるそうです。

そして机上にあるものを見てその名前を彼は言う。それは対話のついでに私が用意したものだ。

「……チェス?」

「はい、図書室ではこういういたたものも自由に貸し出していただけなんです。白川くんはチェスのルールをご存じですか? ご希望でしたら将棋や囲碁、オセロなど他のゲームでも構いません。軽く遊びながらお話ししましょう」

「どれでもいいよ。どれも似たような腕前だから」

「そうですか。では、このままで」

私が一番自信のあるチェスをするようになりました。チェスに限らず、トランプなど頭を使う競い事には練度に限らずそのプレイヤーの性格や癖が如実に表れるものです。これを利用して、彼をプロファイリングすることにしましょう。

トスの結果、白川君が先行である白色の駒を使うことになりました。

お互いに顔を盤面に向けたまま、本日お時間をいただいた本題に入っていきます。

「白川くんはAクラスの現状はご存じですよね？」

「現状？」

長考することなく、一定のペースで駒を動かしながら彼は疑問符を投げ掛ける。

「はい。今、私たち1—Aは大きく分けて二つに分かれています。一つは私がまとめている派閥、そしてもう一つは葛城くんがまとめている派閥です」

「ああそれね。知ってるよ、勿論」

「そこで白川くんには私の派閥に入っていただきたいんです。お願いできますでしょうか？」

「んー……」

膝上に頬杖をつけて音を伸ばしながら白川君は悩みます。

チエスに、ではない。その証拠に彼の手には迷いはない。

「葛城にも同じこと言われてき、まあ保留にしているんだけどね」

「どうやら先を越されてしまったようです。しかし、この様子だと葛城君は勧誘には失敗したそうですね。」

「というか今のところ、どちらにも入る気はないんだ」

彼の現状からは予想ししやすい意志ではありますが、それは求めていた言葉ではありません。

「……それは何故でしょうか？」

「こういう言い方好きじゃないけど、派閥同士のギスギスした感じが苦手だね、どっちにも入っていない今のままが俺には丁度いいんだよ」

平坦な声で彼は行動指針を述べます。それなら彼が葛城君や私の派閥に入ることなく、第三者として居続けることに納得は出来ます。

しかし、気に入りません。

「いずれ私はAクラス全体をまとめ上げます。そうなれば白川くんの懸念は晴れることになります」

「そうなるならそれこそ今決める必要はないでしょ。まあ、一つになった時に逆らう気なんてないからその時はクラスの流れに乗るよ」

まるで彼の中ではAクラスなど取るに足らないことのように、私と葛城君は彼の中で同等の価値でしかないと扱われているようです。

私が彼の視界に入っていないというのであれば、それは私の自尊心を傷つけることになりません。

「……それより坂柳」

「何でしょうか?」

一定のペースを保っていた彼の手が動かなくなり、盤面の時が止まります。

私の手も黒い駒を操ることが無くなりました。なぜならその必要がないからです。

「強すぎ」

チエスは私の完全勝利。一度たりとも彼の劣勢が覆すことなく対局を終えることができました。

「ふふ、白川くんは弱いですね」

「わー……ひどいなあ、遠慮なくボコボコにするなんて」

「白川くんが私の誘いを断るからですよ」

終盤は手加減することなく追い込んでしまったのは少々大人げなかったかもしれない。
せん。

ちよつとしたストレスの発散です。

「はーあ、こりやAクラスは安泰だよほんと」

白川くんは両手をポケットに入れ、背もたれに体重を預けて天井を見上げながらうなだれます。

「白川くんにお聞きしたいことがあります」

「ん、なに?」

彼は上がっていた顎を下ろし、私をまっすぐ見据える。

「白川くんは個々の生活態度がクラス全体の評価に繋がっていると事実、今になって呼称を真島先生から教えていただきましたが、クラスポイントの存在に気付いていましたよね？　いつお気づきになられたのでしょうか？」

彼がクラスポイントの存在に気付いていたという事実を、私が知っていることに對して驚く様子はありません。無駄に時間を奪ってしまう建前を全て取り払い、彼はスムーズに話を進めてくれます。

「まあ、ある程度は初日の真島先生の話を聞いて気づいたよ。言わないなんて言っているようなものだからね」

詳細を発表されたときにクラス全体、おそらくは学年全体を騒がせた事柄を何てことないかのようにおっしゃります。

その言葉だけで、私はこの場を設けた価値を感じます。

彼は私に似た思考を持っている。そしてそれを一か月隠し通した。それは私の中で大きな価値を持っている。

「それを葛城くんの派閥にだけ教えたのは何故ですか？」

「なぜって、坂柳は気づいていたじゃん。俺たち席が一番後ろだから、授業中みんなを見てたらすぐわかったよ」

そして彼は私の方針にも気付いている。

私の派閥のみが粗悪な生活態度の連帯責任に気付き、ひと月経った今、クラスポイントの低下は葛城派に非があると攻め立てる。そのはずでした。

それを白川君が、おそらく意図的に防いだ。

そして、彼は私の作戦を非難しない。今後私がクラスに不利益をもたらしてでも葛城君を貶めようとしても、彼は平然と今と同じく私とも友好的に接してくれるでしょう。

彼はどちらの派閥にも加わらない。そして彼は派閥間の争いには手出しをしない。

「白川くんは今、葛城くんに鼻負しているわけではないんですね」

「してないよ。葛城にも坂柳にも俺にできることはしていくつもりだから。今回のそれは葛城側だけが必要って判断しただけ」

第三勢力ではなく、第三者。白川くんが私と争っていただけなのは少し寂しい気もしますが、それで良しとしましょう。

「安心しました」

ある程度、ここに来るまで腑に落ちなかったことは解消することができました。

なのでこれから、ここに来てから腑に落ちないことを解消することにしましょう。

「それでは白川くん、もう一局チェスをしましょう。今度は真剣勝負です」

「……、」

「先程の対戦、手を抜いていましたよね？ このまま終わるのでは不服です」

私も全力でお相手したわけではありませんが、彼の場合は度が過ぎています。酷いものでした。

そして彼は手加減していることを私に見抜かれることを承知の上でチェスをしていました。

「あー……、そうなっちゃうのか。……ま、いいけどもう一局ぐらい」

観念したようで、彼は背を背もたれから離してチェスの駒を開始前の状態に整えていきます。

しかし、また手を抜いてしまわれては元も子もありません。

「そしてこれで私が勝った暁には、白川くんには私の派閥に入っていたいただきます」

「えー……、それずるくない？」

口の端を僅かに引きつらせていますが、気にしません。

「拒否権はありません。もし、今立ち去って逃げようものなら私は徹底的にあなたをクラスから淘汰することにします」

「はあ……、どうしてそういうのが好きなやつはこうも強引なんだろうかね」

ぼやきつつも手を動かし、二戦目の準備を終えると、彼は気構えるためか口から小さく息を吐く。

そしてこちらを真つすぐ見つめてきました。

「いいよ坂柳。本気でやろう」

勝てば白川くんは私のモノ。

そんなのは彼を引つ張り出すためのただの口実です。彼も本気にしているか定かではありません。

しかし、今彼は私の期待に応えようとしてくれています。

今までの、肩の力を抜いたような眠気にも似た緩い心持から一転、引き締まった目を私に向けてくれています。

口にはしないが、私は感謝の意を胸に抱きます。

——この一か月、私はとても退屈でした。

このまま三年間過ごすのは願ひ下げです。私はもつと、楽しみたい。心躍らせ、悦びを得たい。

それが今、この学校で私の誰よりも近くにいた人物によって、叶うかもしれせん。

「はい、よろしくお願ひします」

——白川くん、私と一緒に遊びましょう。



「すまないが先に向かつていてくれレディ達よ」

媚びへつらい従属していた上級生の女性生徒たちは命令通り男を置いて先へと歩き出した。

この男に加えて私と坂柳、合わせて三人がこの場に残った。できる事なら私も立ち去りたいのだが、後が怖いため発言をしないとこの程度の拒絶でここは我慢しよう。

「……あなたは確か、Dクラスの高円寺さん、ですよね」

「如何にも、私が高円寺コンツェルンの一人息子にして次期社長、高円寺六助だAクラスのリトルガールよ」

その名前は聞いたことがある。

個性豊かな人間溢れるDクラスの中でもトップクラスの変人、そしてこの学校に入学する前から白川の知り合いである男。そんな感じの情報を得た記憶が薄つすらとだがある。

「高円寺さん、あなた英語の使い方を間違えていますよ？ 私は幼女ではありません」

用法の指摘というよりも単純にその言葉で呼ばれることが坂柳にとつては気に入らないらしい。

あらゆる挑発を不敵な笑みで受け流すことが見慣れた光景なんだけどね。

「ふっふっふ。それを決めるのは君ではなく私なのだよ。間違つた用法ではないさ。君がガールと呼ぶに相応しい年齢と体型になれば、そう呼ばせてもらうだけだがねえ。例え君の横にいるガールほどになれば、だよ」

どうやら私はただのガールと認めてもらえたらしい。何も嬉しくはない。

お世辞にも坂柳の容姿は大人びているとは呼べなくて、正直なところ初対面の人はコイツを高校生とは判断してはくれないと思う。

この高円寺という男はさつきまで上級生たちを連れていたことから年上好きなのだと推測できる。坂柳なんて守備範囲外なのだろう。

「それこそ誤りですよ。用法としてはリトルガールは小学生の女の子にしか使わない言葉ですから。この世界はあなたの好き勝手が許されるようになってくるわけではありません」

「常識に捉われないのが私の流儀なのさ」

ファサ、と髪をかき上げる仕草がウザク見える。手癖で度々見せつけているのか妙に様になつてはいた。

「はあ、あなたのような非常識な人間が白川くと知り合いであるというのは到底信じられませんね」

恐らく坂柳にとって呼び方に並んで気に入らないことなのだろう。

ヤツとの繋がりをアピールするかのようない草が坂柳の表情筋に余分な力を宿らせている。

「知り合いではなく、親友なのだよ。君とは違い悠里とは十年來の仲、この学校に訪れて知り合ったようなりトルガールとは年季が違うのさ」

所謂幼馴染という奴か。10代半ばの私たちにとって十年來という言葉を使える人はなかなか少ない。対して坂柳は白川と知り合つて約三ヶ月。その差はなんと四十倍だ。

「知り合つてからの長さで語るようでは底が知れていますね。あなたの身勝手に仕方なく振り回されている悠里くんの姿が容易に想像できません」

……今、坂柳のヤツ白川を下の名前で呼んだ？ 初めて聞いた。本人の前で言う度胸もないくせに、つて言つたら私の身が危険にさらされるから口が裂けても言えない。

目の前の得体のしれない男に対して想像以上に意地になつてみたい。

「我が儘を受け入れ合おうのが親友の特権さ。むしろ振り回しているのは君の方じゃないのかね？ 数多くのガールが悠里に好意を寄せるのは何も疑問に思うことはない。だ

が、悲しいかな、奴に釣り合うガールがないのも明らかさ」

「振り回してはいません。彼には私の仲間に加わつてもらおうよう、日々お誘いしているだけです。白川くんほど優秀な人材を無視する選択肢などありませんから」

あ、呼び方が元に戻った。つまんない。

「ヤツほど優秀な人材を……？ ふははっ！ これ以上私を笑わせないでくれリトルガールよ」

今日一番の高笑いが出てきた。

この世の全てをあざ笑うかのような、独裁者のそれだ。

「また私を……っ！ ……それはどういう意味でしょうか？」

「君はまるで悠里がどれほどの人材か理解しているかのような口ぶりではないか」
「……………」

言っていることは気に入らないけど、仮にも十年以上白川のことを知っている男のセリフとして坂柳はどこか無視できないのかもしれない。

睨みながら坂柳は黙っている。

「悠里がただ知に長け秀でた体たいを有している鬼才とでも思っているのかね？ その程度の理解度だから未だにヤツの勧誘が終わらないのだよ」

やれやれと絵に描いたように胸の高さで両の掌を天に向けている。

「寛大な私が愚かで矮小なりトルガールに一つアドバイスしてやろう」

矮小でリトル。坂柳は一体どれだけ縮んでいくのか。

「悠里についてより知りたくば、悠里のみに捉われないことだ」

いやそれどういう意味？

終始自己中心的で別世界の住人のような発言が目立っていたが本当に理解できない論理を展開をされてしまった。

口を閉じてしまった坂柳はこの男の意図を汲み取っているのだろうか。

「それでは私はレディ達のところに行かせてもらおうよ、シーユー」

言いたいこと言って満足したのか、鼻につく流暢な挨拶で締めくくった高円寺は胸を張って立ち去って行った。

そして残されたのは私と坂柳の二人。

元々二人でショッピングをしていたけど居心地がさつきまでとは雲泥の差になってしまった。坂柳がさつきから無言でいるのが何より気味が悪い。

助けて白川。私はアンタの坂柳の扱いとアンタが淹れるココアの美味しさだけは認めているんだから。

「珍しいじゃない、言われっぱなしなんて」

「ふふ、白川くんのことを知る人物は貴重ですからね。口数が多いままが都合よかった

んですよ」

負け惜しみのように聞こえるかもしれないけど、そうじゃない。

今ここで何かを得て今後行う悪巧みを浮かべている顔だ。

この顔を私は一度見たことがある。

入学して一か月経って、コイツが白川に目を付け始めた時のこと。私にはその時図書館で何をしてきたのかを教えてくださいなかつた。

結果的に白川を勧誘することには失敗したと直ぐには分かつた。でも、坂柳は明らかに悦んでいた。

なぜかは知らない。私は所詮、コイツの駒の内の一人。

「真澄さん、お願いがあります」

優しい言い方をしてるが、私には選択肢なんてない。

「私の予想では、今後クラスポイントが大きく変動するイベントが行われます。しかし私はご存じの通り不自由な体をしているので、内容によっては参加できないこともあるでしょう」

まあ、今回に限っては何を頼まれるかはだいたい予想がつく。

「私が不在の時、真澄さんは白川くんの動きをよく見ておいてください。葛城君の対応は橋本君にお任せします」

できれば白川には、
今まで通り大人しくしてほしい。